

茨城県教育財団文化財調査報告第439集

# 島名前野東遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

令和2年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第439集

しまなまへのひがし

# 島名前野東遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

令和2年3月

国土交通省関東地方整備局常総国道事務所  
公益財団法人茨城県教育財団

## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者から委託を受けて埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所による一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴って実施した、茨城県つくば市に所在する鳥名前野東遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

当遺跡は茨城県から委託を受け、平成11年度から平成17年度にかけて発掘調査を実施し、その成果については『茨城県教育財団文化財調査報告』第191・215・281集として刊行しました。

調査は平成25年度に実施し、古墳時代中期から後期にかけての竪穴建物跡などが確認でき、当時の集落の様相が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります国土交通省関東地方整備局常総国道事務所に対して厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和2年3月

公益財団法人茨城県教育財団  
理事長 小野寺 俊

## 例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が平成25年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市島名字前野3,807番地ほかに所在する島名前野東遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 平成25年6月1日～8月31日  
整理 平成31年4月1日～令和元年6月30日
- 3 発掘調査は、調査課長白田正子のもと、以下の者が担当した。  
首席調査員兼班長 綿引英樹  
次席調査員 綿引博  
調査員 田村雅樹
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長皆川修のもと、以下の者が担当した。  
調査員 茂木悦男
- 5 本書の作成にあたり、第140号竪穴建物跡の竈内から検出された漆喰状物質の自然科学分析についてはバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 6 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真等の資料は、一括して茨城県埋蔵文化財センターにて保管している。

## 凡 例

- 1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、 $X = +6,040$  m、 $Y = +20,560$  mの交点を基準点 (A 1a) とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。



遺構 F-炉跡 P-ピット PG-ピット群 SD-溝跡 SI-竪穴建物跡 SK-土坑  
SY-炭焼窯跡  
土層 K-撓乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1、各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

 焼土・赤彩  炉・火床面・黒色処理  
 竈部材・粘土範囲  
●土器 ○土製品 □石器・石製品 △金属製品 - - - - 硬化面

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は( )を、推定値は[ ]を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構毎の通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 竪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸(径)方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例  $N - 10^{\circ} - E$ )。

- 7 今回の報告分で、整理の段階で遺構名を変更したものと及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 SI137 貯蔵穴2 → SK463、SD91 → 第1号方形周溝遺構

欠番 SK449 ~ 451・455 ~ 458

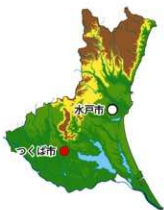
# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	3
第2章 位置と環境	4
第1節 位置と地形	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 古墳時代の遺構と遺物	13
竪穴建物跡	13
漆喰状物質の自然科学分析	35
2 近代の遺構と遺物	43
炭焼窯跡	43
3 時期不明の遺構	47
(1) 土 坑	47
(2) 溝 跡	51
(3) 炉 跡	51
(4) 方形周溝遺構	52
(5) ビット群	53
4 遺構外出土遺物	53
第4節 総 括	56
写真図版	PL 1～PL10
抄 録	
付 図	

## 島名前野東遺跡の概要

## 遺跡の位置と調査の目的

島名前野東遺跡は、つくば市の南西部を流れる谷田川右岸の標高 20～23 m の台地上に位置しています。当遺跡は平成 11 年から平成 17 年にかけて断続的に調査されていますが、今回の調査は一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、公益財団法人茨城県教育財団が平成 25 年度に実施したものです。



## 調査の内容

今回の調査では、たてあなたてものあと 竪穴建物跡 6 棟（古墳時代中期 3・後期 3）、すみやきがまあと 炭焼窯跡 2 基、どこう 土坑 34 基、みせあと 溝跡 3 条、ろあと 炉跡 2 基、ほうけいしゅうこういこう 方形周溝遺構 1 基、ぐん ビット群 2 か所などを確認しました。当遺跡の中心となる時期は、古墳時代であることを確認し、時代とともに集落の様相が変わっていくことが明らかになりました。



平成 25 年度調査区全景（西から）





第 138 号竪穴建物跡から出土した高坏



第 140 号竪穴建物跡竈から出土した甕と支脚



第 140 号竪穴建物跡から出土した遺物



遺構遠景（北西から）

## 調査の成果

今回報告する調査区の面積は 6,636㎡で、以前の調査区の西側に位置しています。当遺跡の集落は、古墳時代の前期（4 世紀）に東側の台地裾部に成立し、中期（5 世紀）から後期（6 世紀）にかけて台地平坦部へと拡大し、さらに西部へと続くことが分かりました。これは谷田川周辺の水田における稲作から、開拓により、台地上の畑作へと食糧の生産活動が拡大していったためと考えられます。

今回の調査では、土師器の坏や甕を中心に、埴、埴、高坏、壺、甌、手捏土器や土製品（土玉、管玉、丸玉、棗玉）、石器（砥石）、石製品（白玉、有孔円板）、金属製品（刀子）などが出土しており、当時の人々の生活の一端を垣間見ることができました。また、この時期、島名熊の山遺跡を中心とする東谷田川流域の他の集落と消長を共にすることが明らかになりました。

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成17年9月27日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成17年10月7日に現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。

平成24年12月12日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに事業地内に鳥名前野東遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成25年2月12日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。平成25年2月26日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、現状保存が困難であることから記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成25年3月5日、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。

平成25年3月11日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長あてに、鳥名前野東遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常総国道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成25年6月1日から8月31日まで発掘調査を実施した。

## 第2節 調査経過

鳥名前野東遺跡の調査の概要を表で記載する。

工程	期間	6月		7月		8月	
調査準備 表土除去 遺構確認							
遺構調査							
遺物洗浄 写真整理							
撤収							

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

鳥名前野東遺跡は、茨城県つくば市鳥名字前野3,807番地ほかに所在している。

つくば市は茨城県の南西部に位置し、筑波山を北端に、その南東へ延びる標高20～25mほどの平坦な台地上に位置している。この台地は筑波・稲敷台地と呼ばれ、東は霞ヶ浦へ流入する桜川、西は利根川に合流する小貝川によって区切られている。両河川の間には、東から花室川、蓮沼川、小野川、谷田川、西谷田川などの中小河川が北から南に向かって流れており、遺跡のある鳥名地区は、谷田川と西谷田川に挟まれた南北に長い台地上に位置している。この台地は、これらの河川やその支流により複雑に開析され、谷津や低地が細長く入り込んでいる。

筑波・稲敷台地は、上部に貝化石を多く含む海成の砂礫層である成田層を基盤とし、その上に黄褐色砂や黄褐色荒砂層である竜ヶ崎層、さらにその上に灰白色の粘土層である常総粘土層、そして表土下を厚く覆う褐色の関東ローム層が堆積し、最上部は腐食土層となっている<sup>1)</sup>。

つくば市南西部の鳥名地区は、谷田川と西谷田川によって開析された、狭長な台地上の中央部に位置している。鳥名前野東遺跡は谷田川に面した標高14～23mの台地北側の縁辺部から西へ続く平坦部に位置し、遺跡の範囲は南北約200m、東西約460mである。低地と台地との標高差は、12～14mである。

今回報告する鳥名前野東遺跡の調査区は、平成11年度から平成17年度まで断続的に調査された調査区の西側にあり、谷田川右岸の標高20～23mの台地上に位置している。調査前の現況は、畑地及び山林である。

### 第2節 歴史的環境

鳥名前野東遺跡周囲の小貝川、西谷田川、谷田川、蓮沼川流域の台地には、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している。ここでは、主に谷田川と西谷田川流域の遺跡について概観する。

旧石器時代は、平北田遺跡<sup>2)</sup>(37)、下河原崎谷中台遺跡<sup>3)</sup>(75)、元宮本前山遺跡<sup>4)</sup>(77)で石器集中地点が確認され、ナイフ形石器や角錐状石器、搔器、尖頭器をはじめ、石核や剥片などが出土している。また、鳥名一町田遺跡<sup>5)</sup>(9)、鳥名境松遺跡<sup>6)</sup>(10)、鳥名ツバタ遺跡<sup>7)</sup>(16)でナイフ形石器や尖頭器、サイドスクレイパー、面野井北ノ前遺跡<sup>8)</sup>(25)で荒屋型彫器、鳥名熊の山遺跡<sup>9)</sup>(7)でナイフ形石器や尖頭器、細石刃、石核などが採集されている。当遺跡<sup>3)</sup>(1)においても、ナイフ形石器が採集されている。これらの遺跡は、谷田川及び西谷田川に面した台地の縁辺部に位置し、特に谷田川の両岸で旧石器時代の遺物が多数採集され、石器製作と狩猟生活の様子を示す資料が蓄積されている。

縄文時代では、元宮本前山遺跡で早期の炉穴、下河原崎谷中台遺跡で早期の炉穴や中期から晩期にかけての堅穴建物跡、鳥名ツバタ遺跡で早期と中期の建物跡やフラスコ状土坑、鳥名境松遺跡で中・後期の建物跡や土器焼成遺構、土坑などがそれぞれ確認されている。これらの遺跡は河川を望む台地の縁辺部に立地し、特に早期の集落が西谷田川左岸で成立する様子が見える。鳥名熊の山遺跡では、早期前半の燃糸文、早期後半の条痕文系の土器片が出土している。そのほか、前期から後期にかけての土器片や石鏃、石斧、磨石、石皿などが採集されており、当時の人々の生活の痕跡をうかがうことができる。

弥生時代の遺跡は当地域では少ない。当遺跡周辺では、鳥名熊の山遺跡南部の埋没谷周辺から後期後半の土器片が採集されているだけである。出土した土器片には糊痕が認められ<sup>10)</sup>、当地域の稲作を考える上で興味深い資料となっている。

古墳時代前期になると、鳥名一町田遺跡では、南関東系の土器を伴う初期の集落が出現し、鳥名熊の山遺跡や鳥名前野遺跡<sup>11)</sup> (6)では集落や集落に付随した形で方形周溝墓3基が確認されているなど、谷田川沿いに小規模な集落が点在するようになる。また、面野井古墳群<sup>12)</sup> (28)では、方形周溝墓4基と円墳1基が確認され、周溝からは南関東系の裝飾壺、及び底部穿孔壺の土師器が出土しており、谷田川上流域に南関東系の文化を持った集団が移住してきたことが明らかとなっている。

中期になると、前述した遺跡に加えて鳥名ツバタ遺跡や谷田部漆遺跡<sup>13)</sup> (56)、土笠丸古屋敷遺跡<sup>14)</sup> (57)、真瀬三度山遺跡<sup>15)</sup> (58)などで集落が西谷田川沿いにも広がりを見せている。特に、元宮本前山遺跡では滑石製模造品の製作跡が確認され、下河原崎谷中台遺跡では県内初の琴柱形石製品の出土が注目される。これらの集落は、台地縁辺部や低湿地へ向かう緩斜面部に適度な距離をおいて営まれており、その立地や経営には、台地裾部の自然湧水を利用した谷津田との関わりが強く考えられる。

後期になると、当遺跡周辺では鳥名熊の山遺跡<sup>16)</sup>、鳥名中代遺跡<sup>17)</sup> (5)、鳥名八幡前遺跡<sup>18)</sup> (3)、鳥名前野遺跡、平北田遺跡などの集落が継続して営まれ、6世紀後半以降、台地全体に集落域が拡大していく様子が確認できる。また、当該期は古墳が急増し、当遺跡周辺では鳥名前野古墳<sup>19)</sup> (8)、鳥名榎内古墳群<sup>20)</sup> (13)、鳥名榎内西古墳群<sup>21)</sup> (14)、鳥名関ノ台古墳群<sup>22)</sup> (18)、面野井古墳群、下河原崎高山古墳群<sup>23)</sup> (74)などがあり、いずれも径10～20mの小円墳を主とした構成からなる地域的な群集墳の在り方を示している。中でも、当遺跡の北側に位置する鳥名関ノ台古墳群は、全長約40mの前方後円墳と円墳27基が存在したと言われ、被葬者は鳥名地区の盟主的存在であった可能性が高い。

奈良時代になると、鳥名地区は急速に集落の再編が進んでいる。その背景には、律令国家の成立と国郡里制の整備が考えられ、当地区は河内郡鳥名郷に編入される。鳥名熊の山遺跡や鳥名八幡前遺跡の集落は、大型建物とそれに付随する掘立柱建物を中心で、いずれも真北を主軸とした配置をとるようになる。さらに、鳥名熊の山遺跡の中央部にL字状に掘立柱建物群が配置され、郷関連の官衙的施設の可能性も指摘されている。一方7世紀に一旦集落が途絶えていた当遺跡や鳥名前野遺跡では、8世紀中頃に再び集落が形成される。それは、空閑地となっていた土地が律令体制の進展と共に再開発の適地となったためと考えられる。しかし、鳥名地区では、この時期、これらの遺跡以外に集落が確認されておらず、継続的に集落が形成された鳥名熊の山遺跡周辺だけに集落が集中する現象が認められる。

平安時代の遺跡数はさらに減少し、現在集落として明確に捉えられるのは鳥名熊の山遺跡と鳥名八幡前遺跡のみである。両遺跡では、鍛冶生産や紡績などの手工業関連の遺構・遺物が確認されている。また、大規模な集落が残り、8世紀以来の集落が消滅していく状況は、律令体制の行き詰まりに伴う集落の再編成と考えることもできる。この時期、鳥名熊の山遺跡では、南部斜面の湧水点に木枠を設置した水場が構築されており、その周辺から多量の土器や木製品が出土している。特に「嶋名」と記された墨書土器や人名が記された木簡が注目される。この水場において、古代の人々による祭祀行為が行われていた可能性が想定される。9世紀の集落再編も10世紀を迎えると新たな展開を示し、鳥名八幡前遺跡の集落は終焉を迎えている<sup>17)</sup>。一方、鳥名熊の山遺跡の集落はそれ以降も存続し、11世紀まで断続的に営まれている。その後の集落の様相は、不明瞭であるが墓坑や井戸跡から平安時代末期と考えられる和鏡<sup>24)</sup>や小銅仏<sup>25)</sup>が出土しており、遺物の面から有力者の存在をうかがうことができる。

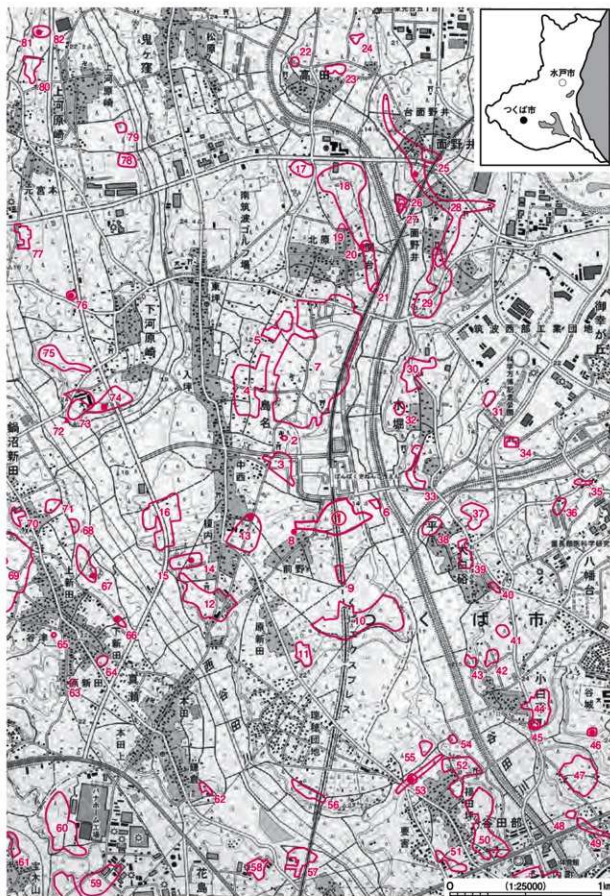
平安時代末期には、鳥名地区周辺は八条院領として立荘された田中荘に組み込まれ、鎌倉時代以降に田中荘は小田氏の支配下となる。当該期の遺跡としては、当遺跡や平出氏の居城と伝えられる面野井城跡〔27〕がある。当遺跡では、方一町に巡る堀に囲まれた方形居館が確認され、鳥名地区一帯を治めていた有力者の居宅と思われる。永仁五年（1297）には、鳥名熊の山遺跡の中央部西寄りに妙徳寺が開山し、鳥名熊の山遺跡では梵鐘の乳や鰐口などの鋳型片が出土した鋳造土坑が確認されている<sup>30)</sup>。また、15世紀後半から17世紀前半にかけての墓域が確認され、妙徳寺との関連をうかがうことができる。妙徳寺の周辺では幅5m、深さ2mの薬研堀が確認され、寺域周辺は防御施設としての機能も果たしていたことが明らかとなってきた<sup>31)</sup>。

※ 本章は、既刊の「鳥名前野東遺跡」及び「鳥名熊の山遺跡」を参照し、加筆した。文中の〈 〉内の番号は、第1図及び表1の当該番号と同じである。

#### 註

- 1) 日本の地質「関東地方」編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 舟橋理「平北田遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告第336集 2011年3月
- 3) a 高野裕隆「下河原崎谷中台遺跡・鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」茨城県教育財団文化財調査報告第282集 2007年3月  
b 齋藤真弥「下河原崎谷中台遺跡・下河原崎高山古墳群 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」茨城県教育財団文化財調査報告第292集 2008年3月
- 4) 高野裕隆「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」茨城県教育財団文化財調査報告第265集 2006年3月
- 5) a 寺門千壽・田原康司・梅澤貴司「鳥名前野東遺跡・鳥名境松遺跡・谷田部漆遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」茨城県教育財団文化財調査報告第191集 2002年3月  
b 飯泉達司「鳥名前野東遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ」茨城県教育財団文化財調査報告第215集 2004年3月  
c 小松崎和治「鳥名境松遺跡・鳥名前野東遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅺ」茨城県教育財団文化財調査報告第281集 2007年3月
- 6) 鹿島直樹「鳥名一町田遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財団文化財調査報告第230集 2004年3月
- 7) a 佐野正「科学博園連絡路谷田部明野線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 ツバタ遺跡・高山古墳群」茨城県教育財団文化財調査報告第22集 1983年3月  
b 菅川修「鳥名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1」茨城県教育財団文化財調査報告第203集 2003年3月
- 8) 鹿島直樹「鳥名関ノ台南B遺跡・面野井北ノ前遺跡 常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書2」茨城県教育財団文化財調査報告第231集 2004年3月
- 9) 西井雄一・渡邊浩美・齋藤貴史・清水哲「鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ」茨城県教育財団文化財調査報告第280集 2007年3月
- 10) 稲田義弘・飯泉達司「鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅹ」茨城県教育財団文化財調査報告第214集 2004年3月

- 11) 福田義弘『鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 鳥名前野遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第175集 2001年3月
- 12) 小林和彦『面野井古墳群 都市計画道路新都市中央通りバイパス建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第391集 2014年3月
- 13) 白田正子『(仮称) 壹丸地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 三度山遺跡・古屋敷遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第132集 1998年3月
- 14) 海老澤稔・見越広幸『鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXX』茨城県教育財団文化財調査報告第437集 2019年3月
- 15) 堀厚直『鳥名中代遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXXⅥ』茨城県教育財団文化財調査報告第438集 2019年3月
- 16) a 青木仁昌『鳥名八幡前遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅸ』茨城県教育財団文化財調査報告第201集 2003年3月  
b 菊池直哉『鳥名八幡前遺跡 都市計画道路鳥名上河原崎線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第283集 2007年3月
- 17) 清水哲『鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XⅨ』茨城県教育財団文化財調査報告第380集 2013年3月
- 18) 新井聡・川村満博『(仮称) 鳥名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 鳥名熊の山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第120集 1997年3月
- 19) 吉原作平・原信田正夫『(仮称) 鳥名・福田坪地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 鳥名熊の山遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第149集 1999年3月
- 20) 註9に同じ
- 21) 葦子博史・坂本勝彦・田中万里子・櫻井二郎『鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XXⅨ』茨城県教育財団文化財調査報告第390集 2014年3月



第1図 鳥名前野東遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院25,000分の1「谷田部」）

表1 鳥名前野東遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町			江戸	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町
①	鳥名前野東遺跡	○	○					42	小白碓民部山遺跡				○			
2	鳥名薬師遺跡				○			43	小白碓水表遺跡				○			
3	鳥名八幡前遺跡				○	○	○	44	小白碓海道端遺跡		○				○	○
4	鳥名本田遺跡				○	○	○	○	45	小白碓海道端塚群						○
5	鳥名中代遺跡				○			46	谷田部カロウ下塚古墳				○			
6	鳥名前野遺跡		○		○	○	○	○	47	谷田部台成井遺跡		○				
7	鳥名熊の山遺跡	○	○	○	○	○	○	○	48	谷田部下成井遺跡		○				○
8	鳥名前野古墳				○				49	谷田部台町古墳群				○		
9	鳥名一町田遺跡	○	○	○			○	○	50	谷田部福田前遺跡		○	○	○		
10	鳥名埜松遺跡	○	○	○					51	谷田部漆出口遺跡		○	○		○	○
11	鳥名タカド口遺跡		○		○				52	谷田部福田遺跡		○	○			
12	鳥名榎内南遺跡	○			○	○			53	谷田部大堀遺跡						○
13	鳥名榎内古墳群				○				54	谷田部山合遺跡		○				○
14	鳥名榎内西古墳群				○				55	谷田部陣馬遺跡		○	○			
15	鳥名榎内遺跡								56	谷田部漆遺跡		○	○	○		
16	鳥名ツバタ遺跡	○	○		○		○	○	57	上堂丸古屋敷遺跡			○		○	○
17	鳥名関ノ台遺跡				○				58	真瀬三度山遺跡		○	○			○
18	鳥名関ノ台古墳群				○				59	二本松遺跡		○				
19	鳥名関ノ台塚						○	○	60	西山遺跡		○				○
20	鳥名関ノ台南A遺跡				○	○			61	苗代山遺跡		○				
21	鳥名関ノ台南B遺跡	○	○			○		○	62	真瀬戸崎遺跡			○		○	○
22	高田和田台遺跡				○				63	真瀬西原遺跡			○			○
23	高田遺跡					○	○		64	真瀬中畑遺跡		○	○			○
24	高田原山遺跡				○	○			65	真瀬新田谷津遺跡		○				
25	面野井北ノ前遺跡	○			○	○	○	○	66	真瀬新田古墳群				○		
26	面野井西ノ台塚						○	○	67	真瀬堀南遺跡				○		
27	面野井城跡						○		68	真瀬堀北遺跡				○		
28	面野井古墳群				○				69	真瀬山田遺跡		○	○	○		
29	面野井南遺跡				○	○	○	○	70	真瀬山田北遺跡		○	○			
30	水堀下道遺跡				○	○			71	鍋沼新田長峰遺跡		○	○			
31	水堀遺跡				○				72	下河原崎高山窟跡			○			
32	水堀屋敷添遺跡		○	○					73	下河原崎高山遺跡			○			
33	水堀道後前遺跡					○			74	下河原崎高山古墳群				○		
34	大和田氏屋敷跡						○	○	75	下河原崎谷中台遺跡		○	○	○	○	
35	柳橋仲畑遺跡				○	○	○	○	76	下河原崎古墳群						
36	柳橋遺跡				○	○	○	○	77	元宮本前山遺跡		○	○			
37	平北田遺跡	○	○		○	○	○	○	78	元中北東藤四郎遺跡						
38	平後遺跡				○		○	○	79	元中北鹿島明神古墳			○			
39	大白碓西ノ裏遺跡				○				80	上河原崎本田遺跡				○	○	○
40	大白碓桜下遺跡				○				81	上河原崎小台古墳				○		
41	大白碓民部山遺跡				○				82	上河原崎八幡臨遺跡				○		





第2図 鳥名前野東遺跡調査区設定図（つくば市都市計画図2,500分の1）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査の概要

島名前野東遺跡は、つくば市の南西部に位置し、谷田川から延びる低地に面した標高14～23mの台地の縁辺部から西へ続く平坦部に位置している。今回の調査区は、今までの調査区の西側にあたり、標高20～23mの台地の平坦部に位置している。調査面積は6,636㎡で、調査前の現況は畑地、山林である。

調査の結果、竪穴建物跡6棟（古墳時代中期3・古墳時代後期3）、近代の炭焼窯跡2基、土坑34基（時期不明）、溝跡3条（時期不明）、竪跡2基（時期不明）、方形周溝遺構1基（時期不明）、ピット群2か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に30箱出土している。主な遺物は、土師器（坏・碗・埴・高坏・壺・甕・小形甕・甔・手捏土器）、土製品（土玉・管玉・丸玉・甕玉・支脚）、石器・石製品（鎌・石臼・白玉）、瓦などである。

### 第2節 基本層序

調査区西部の台地上の平坦面（-E76区）にテストピットを設定し、土層の堆積状況を観察した。土層は10層に分層できる。基本層序は、以下のとおりである。

第1層は、暗褐色を呈する表土層である。粘性・締まりとも普通で、層厚は24～25cmである。

第2層は、橙色粒子を微量と砂粒を少量含む黄褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりとも普通で、層厚は23～26cmである。

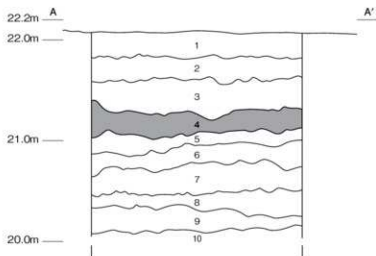
第3層は、黒色粒子を微量含む褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも普通で、層厚は18～43cmである。

第4層は、黒褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりは強く、層厚は14～36cmである。

第Ⅱ黒色帯に相当すると考えられる。

第5層は、白色粒子・黒色粒子・橙色粒子を少量含む褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は8～22cmである。

第6層は、白色粒子・橙色粒子・茶色粒子を少量含む暗褐色を呈するハードローム層である。粘性は強く、締まりは極めて強く、層厚は14～28cmである。



第3図 基本土層図

第7層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は18～30cmである。

第8層は、にぶい黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は12～28cmである。

第9層は、赤色粒子を微量含む灰黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりとも強く、層厚は13～24cmである。

第10層は、黒色粒子を微量含むにぶい黄褐色を呈する粘土層である。常総粘土層に相当すると考えられる。粘性・締まりとも強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層の上面で確認している。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 古墳時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡6棟を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

##### 竪穴建物跡

##### 第135号竪穴建物跡（第4・5図 PL2）

**位置** 調査区中央部の-F 9d4区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸5.84m、短軸5.76mの方形で、主軸方向はN-48°-Wである。壁は高さ20～30cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が、全壁下に巡っている。間仕切り溝が3条確認でき、北西壁を除く各壁から1条ずつ中央に向かって配置されている。

**炉** 長径95cm、短径71cmの楕円形の地床炉である。床面から深さ10cmほど掘りくぼめて構築されている。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

##### 炉土層解説

- 1 赤褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量                      2 赤褐色 焼土粒子多量

**ビット** 6か所。P1～P4は深さ26～62cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ20cmで、配置から出入り口施設に伴うビットである。P6は深さ11cmで、配置から補助柱穴である。第1～4層は柱材抜き取り後の覆土、第5層は間仕切り溝の覆土である。

##### ビット・間仕切り溝土層解説（各ビット共通）

- 1 褐色 ロームブロック中量    4 にぶい黄褐色 ロームブロック少量  
2 暗褐色 ロームブロック中量    5 灰黄褐色 ロームブロック少量（間仕切り溝）  
3 にぶい黄褐色 ロームブロック中量

**貯蔵穴** 南コーナー部の壁際に位置し、長軸79cm、短軸70cmの長方形である。深さは38cm、底面は皿状で、壁は外傾している。4層に分層でき、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。外周部に南北幅2.30m、東西幅1.76m、高さ5cmほどの高まりがある。

##### 貯蔵穴土層解説

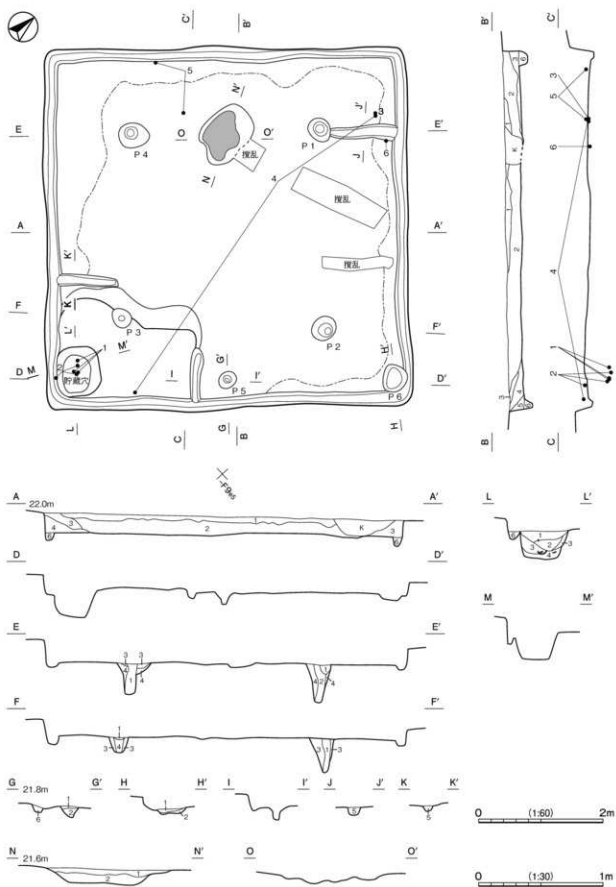
- 1 黒褐色 ロームブロック少量    4 褐色 ローム粒子多量、粘土ブロック中量、ロームブ  
2 にぶい黄褐色 ローム粒子中量    ロック少量、炭化粒子微量  
3 黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

**覆土** 6層に分層できる。第3～5層はロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第2層はさらにその上に埋め戻された層、第1層は埋め戻された後の自然堆積の層である。

##### 土層解説

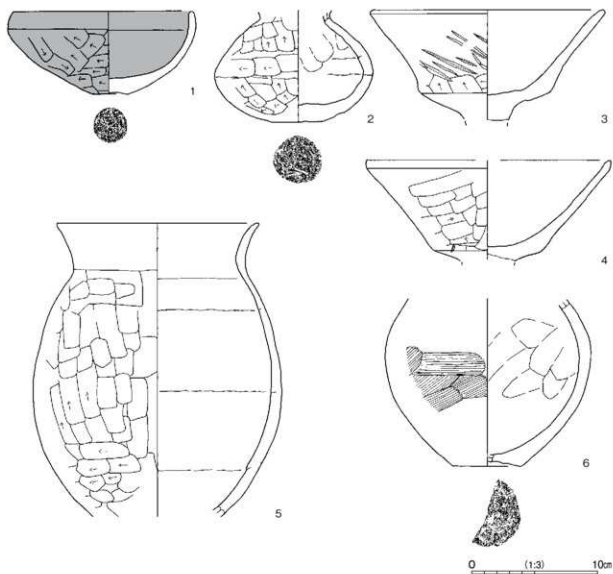
- 1 黒褐色 ロームブロック少量    4 黒褐色 ロームブロック少量、炭化物微量  
2 にぶい黄褐色 ローム粒子中量    5 黒褐色 ロームブロック中量  
3 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物微量    6 にぶい黄褐色 ローム粒子多量

**遺物出土状況** 土師器片339点（坏15、碗1、埴1、高杯39、甕類283）のほか、炭化材2点が覆土中から出土している。遺物は建物を埋め戻した覆土の層より下の床面及び貯蔵穴内から多く出土している。建物を埋め戻す以前に遺物を遺棄したものと考えられる。1・2は貯蔵穴の覆土下層から、3～6は床面及び覆土下層から出土している。遺物は、いずれも壁際から出土している。



第4图 第135号竖穴建物跡実測图

所見 建物の四方の壁際に焼土を含む覆土の層が確認された。建物を廃棄する際に、壁上から焼土を含む覆土を投げ込んだものと考えられる。時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第5図 第135号竪穴建物跡出土遺物実測図

第135号竪穴建物跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	142	66	27	長石・石英	明赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り 体部内面ナデ	貯藏穴覆土下層	95% PL.5
2	土師器	埴	-	(89)	40	長石・石英・赤母	普通	普通	体部外面縦・斜位のへう張り 体部内面ナデ	貯藏穴覆土下層	70% PL.5
3	土師器	高坏	184	(87)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部内・内面横ナデ 体部外面上位一部へう張り 下位へう張り 体部内面ナデ	床面	50%
4	土師器	高坏	194	(80)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面へう張り 内面ナデ	覆土下層 床面	40%
5	土師器	甕	160	(234)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部内・内面横ナデ 体部外面縦・横位のへう張り 体部内面へうナデ 内面に輪状みね	床面	70% PL.6
6	土師器	甕	-	(133)	[5.3]	長石・石英	明褐色	普通	口縁部外上位へう張り調整、下位へう張り 体部内面ナデ	床面	30%

### 第136号竪穴建物跡（第6～8図 PL 2）

**位置** 調査区中央部の-F 9区、標高22mの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸7.48m、短軸7.32mの方形で、主軸方向はN-42°-Wである。壁は高さ4～18cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、南と西のコーナー部と間仕切り溝の周辺を除き、中央部から壁際にかけて踏み固められている。壁溝が、攪乱により削平されている部分を除いて、全壁下を巡っている。間仕切り溝が、北東壁から中央に向かって2条配置されている。

**炉** 2か所。炉1は中央部から東寄り、炉2は北西壁際に位置している。炉1は、長径65cm、短径50cmの楕円形の地床炉である。床面から深さ9cmほど掘りくぼめて構築されている。炉床面は、第2層が火熱を受けて赤変硬化している。2層に分層でき、ロームブロックなど含まれていることから、埋め戻されている。炉2は、後世の攪乱により大部分が削平されており、火熱を受けたローム面が一部検出されたのみで、土層は観察できなかった。炉1と炉2の新旧関係は不明である。

#### 炉1土層解説

1 明赤褐色 焼土ブロック多量、炭化物・ローム粒子微量      2 に近い黄褐色 ローム粒子多量、焼土ブロック中量

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ70～78cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ28cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。第1～3層は柱材を抜き取った後の覆土、第4・5層は柱の掘方への埋土である。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

1 黒褐色 粘土ブロック多量、ローム粒子・焼土粒子微量      4 暗褐色 ロームブロック中量  
2 暗褐色 粘土ブロック少量、ローム粒子微量      5 褐色 ロームブロック中量  
3 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

**貯蔵穴** 南コーナー部の壁際に位置しているが、東側が攪乱により削平されている。長軸80cm、短軸50cmの隅丸長方形と推定される。深さは43cm、底面は皿状で、壁は外傾している。覆土は3層に分層でき、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

#### 貯蔵穴土層解説

1 褐色 ロームブロック中量      3 灰黄褐色 ロームブロック中量  
2 暗褐色 ロームブロック中量

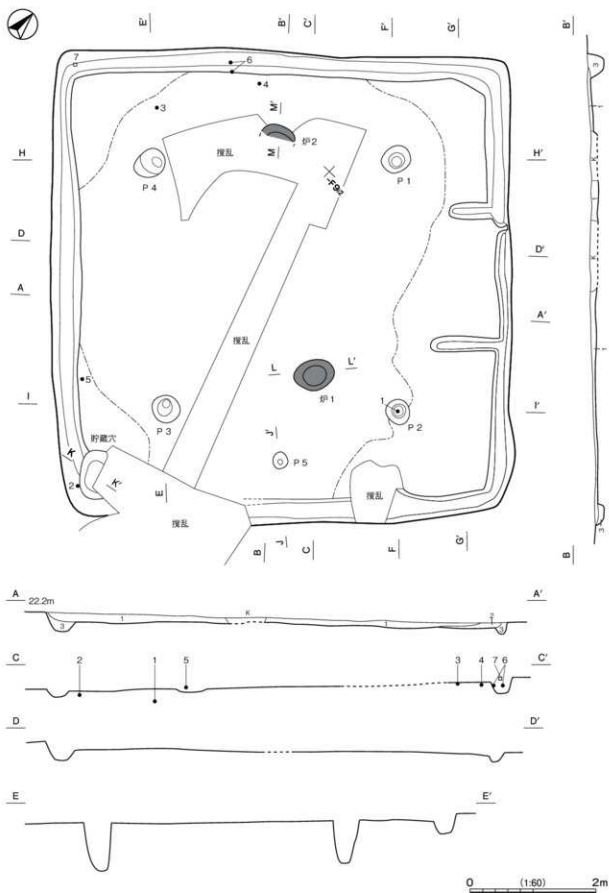
**覆土** 遺存している掘り込みは浅いが、土層は3層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

#### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量      3 暗褐色 ローム粒子中量  
2 に近い黄褐色 ロームブロック少量

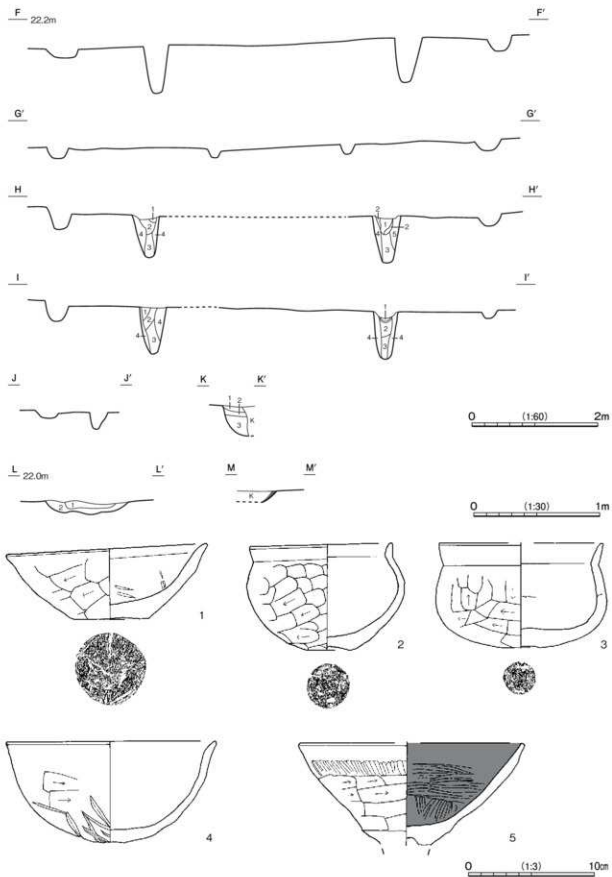
**遺物出土状況** 土師器片112点（坏10、碗7、高杯22、甕類73）が出土している。一部攪乱を受けており、遺存状態はよくないが、遺物は北西壁際及び南部の貯蔵穴付近を中心に多く出土している。1はP2の覆土上層から、2は南コーナー部の貯蔵穴付近から、3・4はいずれも西壁際の床面から、6は壁溝の覆土上層から出土している。7は西コーナー部の覆土上層から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から5世紀中葉に比定できる。

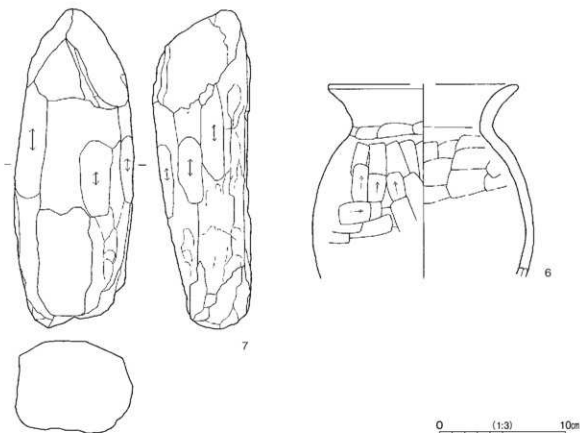


第6图 第136号竖穴建物跡实测图





第7图 第136号竖穴建物跡・出土遺物実測図



第8図 第136号竪穴建物跡出土遺物実測図

第136号住居跡出土遺物観察表(第7・8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	15.9	5.9	5.7	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のヘラ削り 体部内面ナデ 一部ヘラ削き	P2 覆土上層	95% PL 5
2	土師器	碗	11.1	8.5	3.3	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のヘラ削り 体部内面ナデ	床面	80% PL 5
3	土師器	碗	[12.9]	8.3	2.6	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位・横位・斜位のヘラ削り 体部内面ナデ	床面	60%
4	土師器	碗	16.4	8.1	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り、一部ヘラ削き 体部内面ヘラナデ	床面	60%
5	土師器	高坏	[17.5]	(8.1)	-	長石・石英・黒色粒子・細塵	にぶい赤褐	普通	坏部外面ヘラ削き後ヘラ削り 体部内面ヘラ削き	覆土下層	40%
6	土師器	甕	14.8	15.5	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面縦位・横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	準遺土上層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
7	砥石	25.4	9.5	7.9	2.382	凝灰岩	砥面4面	覆土下層	PL 9

第137号竪穴建物跡(第9～13図 PL 2)

位置 調査区中央部の-F 9b1区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第463号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸8.40m、短軸8.34mの方形で、主軸方向はN-9°-Wである。壁は高さ52～54cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦な貼床で、中央部が踏み固められている。貼床は、地山にロームブロックを多量に含む第10層を埋土して構築されている。壁溝が全壁下を巡っている。間仕切り溝が、東西の壁から中央に向かって5条配置されている。

**竈** 北壁の中央部に付設されている。焚き口部から煙道部までは120cm、燃焼部の幅は56cmである。燃焼部は床面から8cmほど掘りくぼめられ、第12・13層を埋土して構築されている。軸部は、地山の上に白色粘土粒子やロームブロックなどを含む第8～11層を積み上げて構築されている。第1～5層は、粘土粒子や焼土粒子、ローム粒子などを含む竈の構築材の崩落土である。火床面は第12層の上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に30cmほど掘り込まれ、外傾して立ち上がっている。第6層は煙道部からの流入土である。

#### 竈土層解説

1 灰黄褐色 粘土粒子多量、焼土ブロック中量、ロームブロック微量	8 赤褐色 白色粘土粒子多量
2 にぶい赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子微量	9 灰黄褐色 白色粘土粒子多量、炭化物中量、ロームブロック少量、焼土ブロック微量
3 黒暗赤褐色 粘土ブロック中量	10 にぶい黄褐色 焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量
4 黒褐色 粘土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量	11 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
5 灰白色 炭化粒子中量、焼土粒子微量	12 明赤褐色 焼土ブロック多量
6 灰褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	13 明黄褐色 焼土粒子少量
7 灰黄褐色 焼土粒子中量、ロームブロック少量	

**ピット** 10か所。P1～P4は深さ75～90cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ58cm、P6は深さ15cmで配置からいずれも出入り口施設に伴うピットと考えられる。P7・P8は深さ40～80cmで、配置から補助柱穴と考えられる。P9・P10はいずれも壁際に位置するが、性格は不明である。P1の第2～4層は柱材を抜き取った後の覆土、第5層が柱材を据え付けた際の掘方への埋土である。P2～P4の第2～5層は柱材を抜き取った後の埋土、第1層が柱材を抜き取った後の流入土の層である。P5の第1～4層は柱材を抜き取った後の埋土、第5層が柱材を抜き取った際にくずれた層である。

#### P1土層解説

1 暗褐色 ロームブロック中量
2 褐灰色 ロームブロック中量
3 黒褐色 ロームブロック少量
4 灰黄褐色 ロームブロック少量
5 黄褐色 ロームブロック多量

#### P2～P4土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量
2 褐灰色 ロームブロック多量
3 灰黄褐色 ロームブロック多量
4 にぶい黄褐色 ローム粒子多量
5 黄褐色 ローム粒子中量

#### P5土層解説

1 褐色 ロームブロック中量
2 にぶい黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
3 暗褐色 ローム粒子中量
4 灰黄褐色 ロームブロック中量
5 黄褐色 ロームブロック多量

#### P6土層解説

1 褐色 ロームブロック中量
----------------

#### P7・P8土層解説

1 褐色 ロームブロック中量
2 黄褐色 ロームブロック多量
3 にぶい黄褐色 ロームブロック多量

#### P9・P10土層解説

1 にぶい黄褐色 ロームブロック多量
2 黄褐色 ロームブロック多量

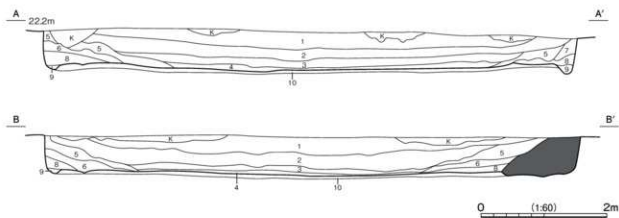
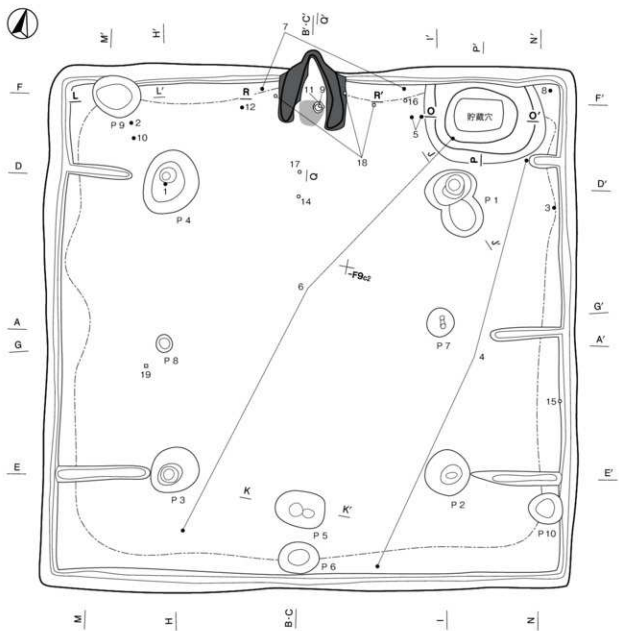
#### 間仕切り溝土層解説

1 灰褐色 ロームブロック少量
-----------------

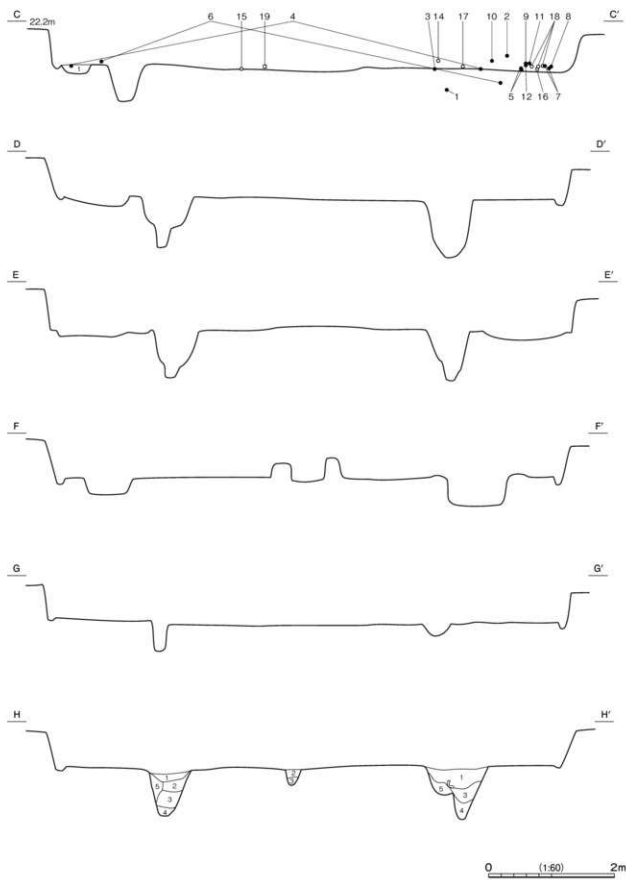
**貯蔵穴** 竈の東側に位置し、長軸90cm、短軸72cmの隅丸長方形である。深さは46cmで、底面は皿状で、壁は外傾している。4層に分層でき、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。外周部に東西幅192m、南北幅127m、高さ4cmほどの高まりがある。

#### 貯蔵穴土層解説

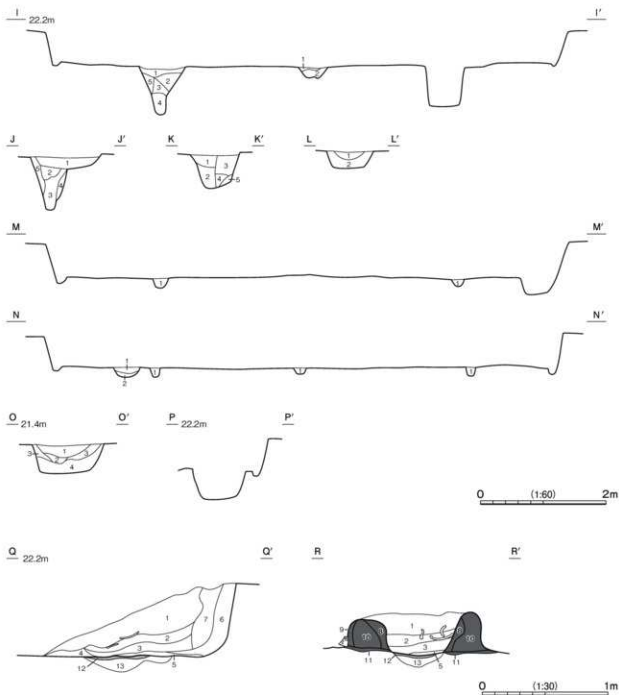
1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	3 褐色 ロームブロック中量
2 暗褐色 ローム粒子少量	4 にぶい黄褐色 ローム粒子多量



第9图 第137号竖穴建物跡实测图(1)



第 10 图 第 137 号竖穴建物跡实测图(2)



第11図 第137号竪穴建物跡実測図(3)

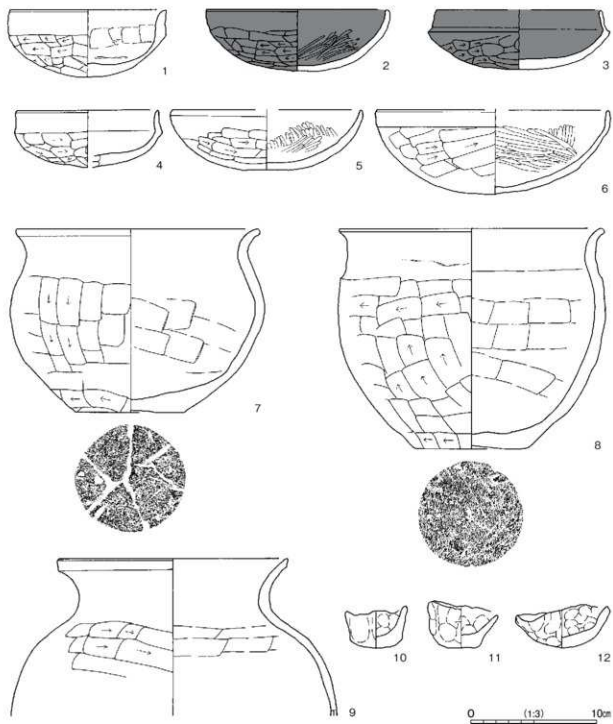
**覆土** 9層に分層できる。第4・7層は、ロームブロックや焼土ブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1～3層は、埋め戻された後に流入した自然堆積の層である。第10層は掘方への埋土である。

**土層解説**

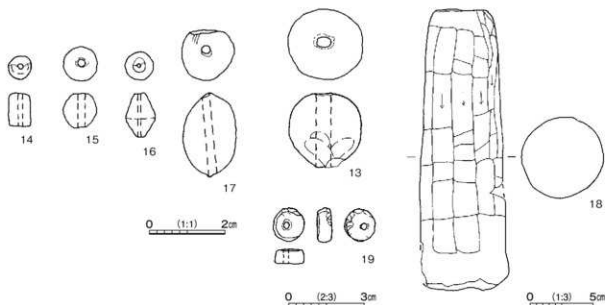
- |         |                       |         |                           |
|---------|-----------------------|---------|---------------------------|
| 1 黒色    | ローム粒子微量               | 7 濃い黄褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック少量・炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色   | 暗褐色土ブロック少量、ローム粒子微量    | 8 黄褐色   | ローム粒子多量、焼土粒子微量            |
| 3 黒褐色   | ローム粒子少量、焼土粒子微量        | 9 灰黄褐色  | ロームブロック中量                 |
| 4 濃い黄褐色 | ロームブロック多量             | 10 明黄褐色 | ロームブロック多量                 |
| 5 黒褐色   | ローム粒子・焼土粒子少量、炭化粒子微量   |         |                           |
| 6 濃い黄褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 |         |                           |

**遺物出土状況** 土師器片 184点 (坏60, 高坏2, 甕類118, 手捏土器4), 土製品6点 (土玉1, 管玉1, 丸玉1, 棗玉2, 支脚1), 石製品1点 (白玉), 瓦1点が出土している。遺物は竈や貯蔵穴周辺を中心に、北壁際の床面から覆土中層にかけて出土している。他の遺構と比べ、手捏土器や土製の玉類が竈内や床面、覆土下層から多く出土している。9と11は竈内から出土している。9は火床面から正位の状態で出土している。14・16・17は、竈周辺の床面や覆土中層から出土している。1はP4内から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第12図 第137号竈穴建物跡出土遺物実測図(1)



第13図 第137号竪穴建物跡出土遺物実測図(2)

第137号竪穴建物跡出土遺物観察表 (第12・13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴はか	出土位置	備考
1	土師器	環	124	5.5	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへら割り 体部内面へらナテ 輪縁のみ	P4内	95% PL.5
2	土師器	環	142	4.9	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへら割り 体部内面へらナテ	覆土中層	95% PL.5
3	土師器	環	[130]	4.7	-	長石・石英	黒	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへら割り	床面	80%
4	土師器	環	112	4.6	-	長石・石英・赤色粒子・副礫	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへら割り 体部内面ナテ	床面	40%
5	土師器	環	[149]	4.8	-	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへら割り 体部内面へらナテ	床面	30%
6	土師器	環	[184]	6.7	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへら割り 体部内面へらナテ	床面	80% PL.5
7	土師器	壺	192	14.7	8.8	長石・石英	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへら割り 体部内面斜位のへらナテ	覆土下層	90% PL.5
8	土師器	壺	[209]	17.5	8.3	長石・石英・黒色粒子・副礫	にぶい褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位・縦位のへら割り 体部内面横位のへらナテ	覆土下層	60%
9	土師器	壺	184	(124)	-	長石・石英・赤色粒子・副礫	褐色	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面へら割り 体部内面へらナテ	壺内	30%
10	土師器	子粒土部	4.8	3.3	4.0	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外・内面ナテ	覆土下層	80% PL.5
11	土師器	子粒土部	5.3	3.7	2.1	長石・石英	褐色	普通	体部外・内面ナテ	壺内	95% PL.5
12	土師器	子粒土部	7.1	3.5	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	体部外・内面ナテ	覆土下層	95% PL.5

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
13	土玉	2.9	3.0	0.6	20.34	長石・石英	にぶい黄褐色	外面ナテ 一方からの穿孔	覆土中	PL.9
14	碧玉	0.6	0.9	0.1	0.22	長石	明赤褐色	外面ナテ 断面は円筒形	覆土中層	PL.9
15	九玉	0.9	0.9	0.2	0.77	長石	黒褐色	外面ナテ 一方からの穿孔	床面	PL.9
16	碧玉	0.8	1.2	0.1	0.54	長石	にぶい褐色	外面ナテ 一方からの穿孔	床面	PL.9
17	碧玉	1.4	2.2	0.2	3.09	長石	明赤褐色	外面ナテ 一方からの穿孔	床面	PL.9

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
18	支脚	7.0	4.6	22.3	(106)	長石	にぶい褐色	外面縦方向のへら割り	覆土下層	PL.9

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
19	白玉	1.2	0.6	0.2	1.46	滑石	断面は円筒状 片面穿孔	覆土下層	PL.9



### 第138号竪穴建物跡（第14・15図 PL3）

**位置** 調査区中央部のF 8c9区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 西部が攪乱により壊されているため、南北軸は4.54mで、東西軸は3.32mしか確認できなかった。方形と推定され、主軸方向はN-24°-Wと推定される。壁は高さ20～24cmで、ほぼ直立している。

**床** 平坦で、中央部が踏み固められている。壁溝が壁下を巡っている。

**炉** 2か所。炉1・炉2ともに、北西壁寄りに位置している。炉1は長径84cm、短径75cmの楕円形の地床炉である。床面から深さ7cmほど掘りくぼめて構築されている。炉床面は第2層上面で、火熱を受けて赤変硬化している。第2層は炉の埋土である。炉2は床面が赤変しているもの、遺存状態が悪く、土層などは観察できなかった。炉1と炉2の新旧関係は不明である。

#### 炉1土層解説

- |        |                       |          |                               |
|--------|-----------------------|----------|-------------------------------|
| 1 灰黄褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 | 2 にぶい黄褐色 | 焼土粒子中量、焼土ブロック・炭化物少量、ロームブロック微量 |
|--------|-----------------------|----------|-------------------------------|

**ピット** 3か所。P1・P2は深さ18cm・38cmで、配置から主柱穴である。P3は深さ40cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。第1～3層は柱を抜き取った後の覆土である。第4・5層は掘方への埋土である。南東壁際のP3の周りに、南北幅1.86m、東西幅1.90m、高さ8cmほどの高まりがある。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

- |          |                     |       |                      |
|----------|---------------------|-------|----------------------|
| 1 褐色     | ロームブロック・炭化物・焼土粒子微量  | 4 黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、黒色土ブロック少量 | 5 黄褐色 | ロームブロック中量            |
| 3 褐色     | ロームブロック中量           |       |                      |

**貯蔵穴** 東コーナー部に位置し、長径90cm、短径80cmの楕円形である。深さは60cm、底面はU字状で、壁はほぼ直立している。4層に分層でき、ロームブロックなどが含まれていることから、埋め戻されている。P3外周部の高まりを掘り込んで構築されている。

#### 貯蔵穴土層解説

- |          |                 |       |                      |
|----------|-----------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子少量         | 3 暗褐色 | 焼土ブロック少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物微量 | 4 褐色  | ロームブロック少量、炭化物・焼土粒子微量 |

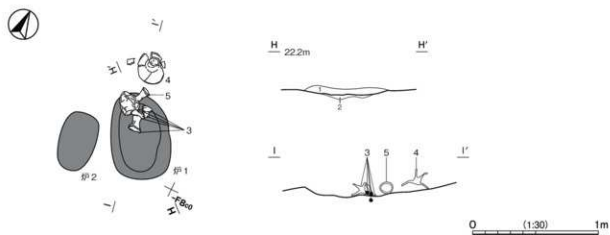
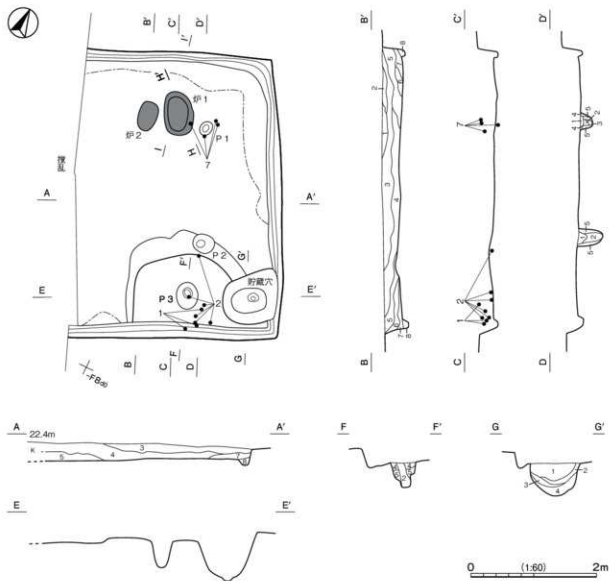
**覆土** 8層に分層できる。第2～8層はロームブロックなどが含まれていることから埋め戻されている。第1層は自然堆積の層である。第6～8層が第1段階、第2～5層が第2段階の埋め戻しと推定される。第8層は壁溝の層である。

#### 土層解説

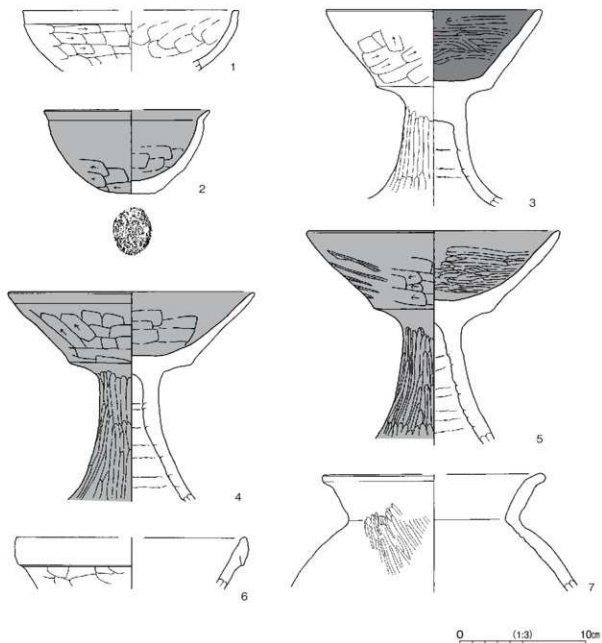
- |          |                  |          |                       |
|----------|------------------|----------|-----------------------|
| 1 黒褐色    | ローム粒子少量          | 5 灰黄褐色   | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子少量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量        | 6 褐色     | ロームブロック少量             |
| 3 褐色     | ローム粒子中量          | 7 暗褐色    | ローム粒子中量               |
| 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 8 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量             |

**遺物出土状況** 土師器片47点（坏7、椀1、高杯7、甕類32）が出土している。遺物は遺構西側が攪乱で壊されているものの、炉1周辺とP3周辺の覆土下層を中心に多く出土している。3・5は炉1の火床面から横位の状態、4は炉1の北側の床面から逆位の状態出土している。1は南東壁際の覆土中層から出土した破片が接合したものである。2はP3付近の覆土中層・下層から出土した破片が接合したものである。7はP1周辺の床面と覆土中層から出土した破片が接合したものである。6は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から5世紀中葉と考えられる。



第 14 图 第 138 号竖穴建物跡实测图



第15図 第138号竪穴建物跡出土遺物実測図

第138号竪穴建物跡出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	[17.0]	(4.8)	-	長石・石英	橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面斜位のヘラナデ	覆土中層	30%
2	土師器	碗	[13.2]	6.7	3.7	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面下縁横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	覆土中・下層	60% Pl. 6
3	土師器	高坏	17.0	(15.7)	-	長石・石英・赤色砂子	にぶい橙	普通	体部外面斜位のヘラ削り 内面横位のヘラ削り 脚部外面縦位のヘラ削り 脚部内面に輪積み痕	火床面	80% Pl. 6
4	土師器	高坏	19.4	(16.7)	-	長石・石英	橙	普通	体部外面斜位のヘラ削り 内面ヘラナデ 脚部外面縦位のヘラ削り 脚部内面に輪積み痕	床面	80% Pl. 6
5	土師器	高坏	19.9	(17.0)	-	長石・石英	明赤褐	普通	体部外面斜位のヘラ削り 内面横位のヘラ削り 脚部外面縦位のヘラ削り 脚部内面に輪積み痕	火床面	80% Pl. 6
6	土師器	壺	[18.2]	4.1	-	長石・石英・赤色砂子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 肩部外面ヘラナデ	覆土中	10%
7	土師器	甕	[17.6]	(9.3)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 体部内面ナデ	覆土中層	10%

### 第139号竪穴建物跡（第16・17図 PL3）

**位置** 調査区西部の-F 8a1区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長軸6.18m、短軸5.94mの方形で、主軸方向はN-16°-Wである。壁は高さ10～28cmで、ほぼ直立している。

**床** 西コーナー部とP1周辺、東壁の一部が攪乱により壊されているが、ほぼ平坦で、東西のコーナー部を除いて、全面が踏み固められている。西コーナー部と北壁下の一部が攪乱をうけているもの、壁溝は全周していたと推測される。

**炉** 北壁際に位置し、長径84cm、短径74cmの楕円形の地床炉である。床面から深さ15cmほど掘りくぼめて構築されている。炉床面は、第2層上面が火熱を受けて赤変硬化している。第1層はロームブロックを含んでおり、埋め戻されている。

#### 炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量 2 にぶい褐色 焼土ブロック・ローム粒子中量

**ピット** 5か所。P1～P4は深さ40～50cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ30cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。第1～3層が柱材を抜き取った後の埋土、第4・5層が柱材の掘方への埋土である。

#### ピット土層解説（各ピット共通）

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 4 にぶい黄褐色 ロームブロック多量  
2 にぶい黄褐色 ロームブロック多量 5 灰黄褐色 ロームブロック少量  
3 褐色 ロームブロック多量

**貯蔵穴** 南西コーナー部に位置し、長軸160cm、短軸140cmの長方形である。深さは46cm、底面はほぼ平坦で、壁は外傾している。4層に分層でき、第4層はロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1～3層は自然堆積の層である。外周部から壁際にかけて南北幅1.63m、東西幅1.39m、高さ13cmほどの高まりがある。

#### 貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量 3 にぶい黄褐色 ロームブロック多量  
2 灰黄褐色 ロームブロック中量 4 灰黄褐色 ロームブロック多量

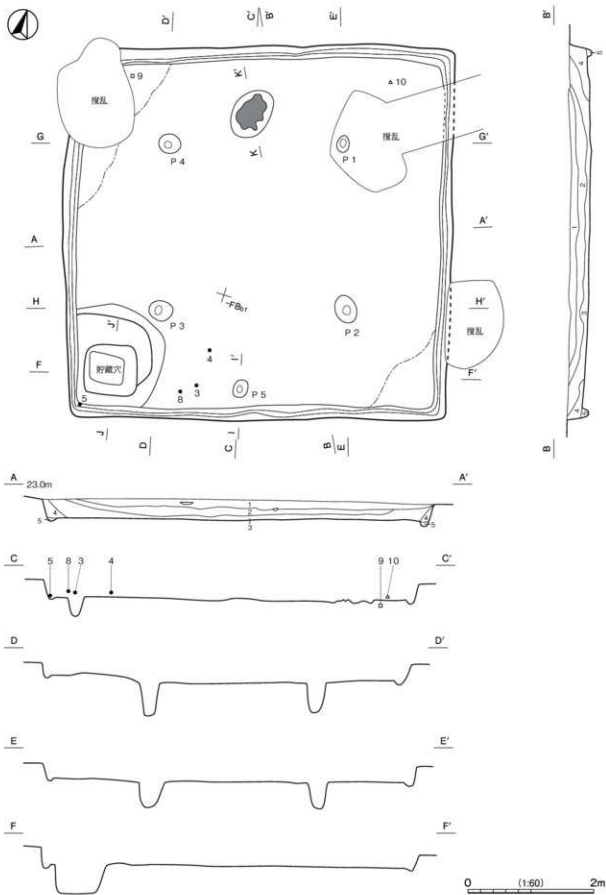
**覆土** 5層に分層できる。第4・5層は、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。第1～3層は自然堆積の層である。

#### 土層解説

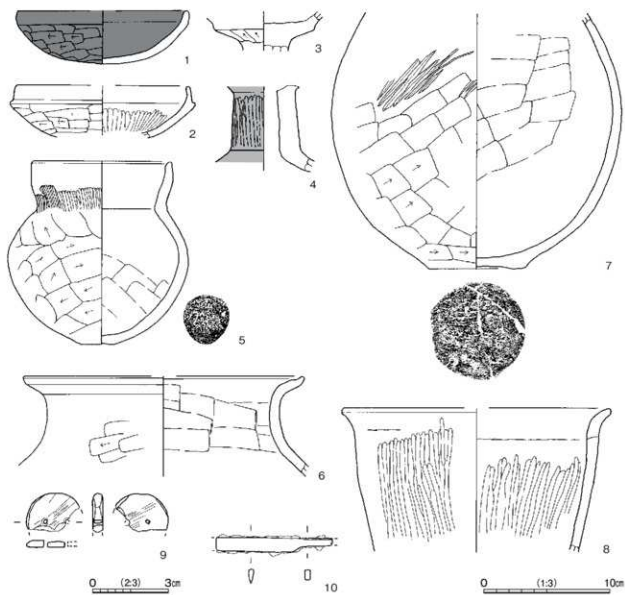
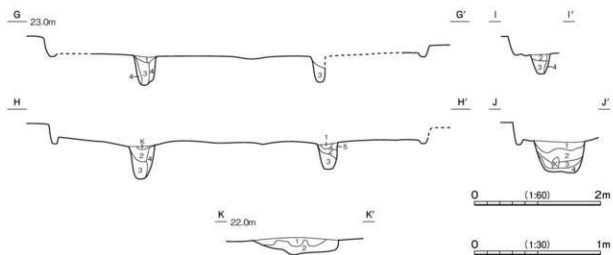
- 1 黒褐色 ローム粒子微量 4 にぶい黄褐色 ロームブロック中量  
2 黄褐色 ローム粒子少量 5 明黄褐色 ロームブロック少量  
3 褐色 ローム粒子中量

**遺物出土状況** 土師器片241点（坏17、椀4、高杯30、壺1、甕類188、甗1）、石製品1点（有孔円板）、金属製品1点（刀子）が出土している。遺物は南西コーナー部の貯蔵穴付近を中心に遺構全体から出土している。1・2は覆土中から出土した破片が接合したものである。3・4は貯蔵穴東側の覆土下層から出土している。5はほぼ完形で貯蔵穴南側の壁際から正位の状態で出土している。6・7は覆土中から出土した破片が接合したものである。8は南壁際の覆土下層から出土した破片が接合したものである。9は北東コーナー部の床面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。



第 16 图 第 139 号竖穴建物跡实测图



第17图 第139号竖穴建物跡·出土遺物実測図

第139号竪穴建物跡出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	136	4.3	-	長石・石英・赤色粒子	黒黒	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへう削り 体部内面ナテ	西部覆土中	80% PL.6
2	土師器	坏	138	(4.1)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面横位のへう削り 体部内面横位のへう削り	北部覆土中	50% PL.6
3	土師器	高坏	-	(3.2)	-	長石・石英・細粒	橙	普通	坏部外面斜位のへう削り 坏部内面ナテ	覆土下層	20%
4	土師器	高坏	-	(6.8)	-	長石・石英	橙	普通	脚部外面縦位のへう削り 脚部内面ナテ	覆土下層	10%
5	土師器	小形壺	11.0	14.7	2.9	長石・石英	にぶい黒	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外面上位縦位のへう削り 中位斜位のへう削り 体部内面斜位のへう削り	覆土下層	95% PL.6
6	土師器	壺	[22.4]	(8.0)	-	長石・石英・雲母	にぶい黒	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部内面へう削り	北部覆土中	20%
7	土師器	壺	-	(20.6)	7.6	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面斜位のへう削り。素焼上の積層痕 体部内面へう削り	北部下層	40%
8	土師器	瓶	[21.4]	(11.5)	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外・内面横ナテ 体部外・内面縦位のへう削り	覆土下層	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
9	穿孔瓦	(1.6)	(2.1)	0.4	(2.11)	澄石	両面平頭 斜方向の積層 片側穿孔 孔径0.13cm	床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
10	刀子	(9.3)	1.3	0.5	(18.7)	鉄	茶臼断面四角形 刃部断面三角形	覆土下層	PL.9

#### 第140号竪穴建物跡(第18～24図 PL.4)

位置 調査区西部の-E 7.8区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 一辺6.88mほどの方形で、主軸方向はN-45°-Wである。壁は高さ50～54cmで、直立している。

床 平坦で、中央部が踏み固められている。壁下には壁溝が巡っている。間仕切り溝が、南西の壁から中央に向かって2条配置されている。

竈 北西壁の中央部に付設されている。焚き口部から煙道部までは130cm、燃焼部の幅は44cmである。火床部は床面から8cmほど掘りくぼめ、地山にロームブロックを含む第7層を埋め戻して構築している。袖部は地山の上にロームブロックを含む第8・9層を貼り付けた上に、粘土主体の第4～6層を積み上げて構築されている。火床面は第7層の上面で、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外に30cmほど掘り込まれ、火床面からは、ほぼ垂直に立ち上がっている。最下層の第3層から白色の漆喰状の物質が検出されている。第1・2層は天井部の崩落層である。

#### 竈土層解説

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| 1 明黄褐色 焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 6 明黄褐色 ロームブロック中量      |
| 2 明赤褐色 焼土ブロック中量、炭化粒子少量 | 7 にぶい黄褐色 ロームブロック多量    |
| 3 褐褐色 灰土・ローム粒子・焼土粒子少量  | 8 灰黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| 4 にぶい黄褐色 ロームブロック中量     | 9 黄褐色 ローム粒子中量         |
| 5 明赤褐色 ロームブロック中量       |                       |

ピット 5か所。P1～P4は深さ84～99cmで、配置から主柱穴である。P5は深さ38cmで、配置から出入り口施設に伴うピットである。P1～P4の第1～5層は柱材抜き取り後の埋土である。P5の第1～4層も柱材抜き取り後の埋土である。

#### P1～P4土層解説

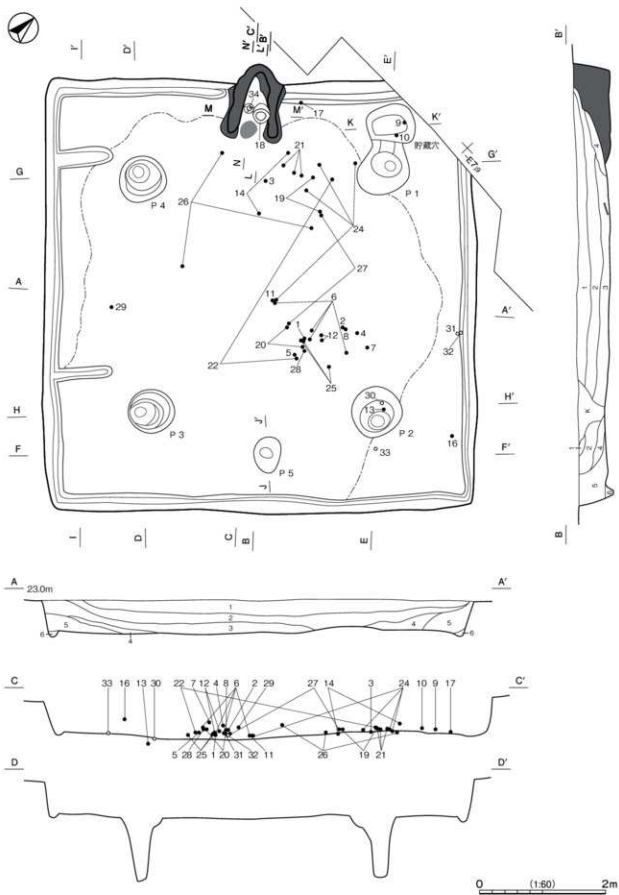
- 黒褐色 焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- にぶい黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 灰黄褐色 ロームブロック少量
- 褐色 ローム粒子中量
- 黄褐色 ロームブロック中量

#### P5土層解説

- 黄褐色 ロームブロック多量
- にぶい黄褐色 ロームブロック中量
- 明黄褐色 ロームブロック中量、黒色土粒子微量
- 黄褐色 ロームブロック中量、黒色土粒子微量

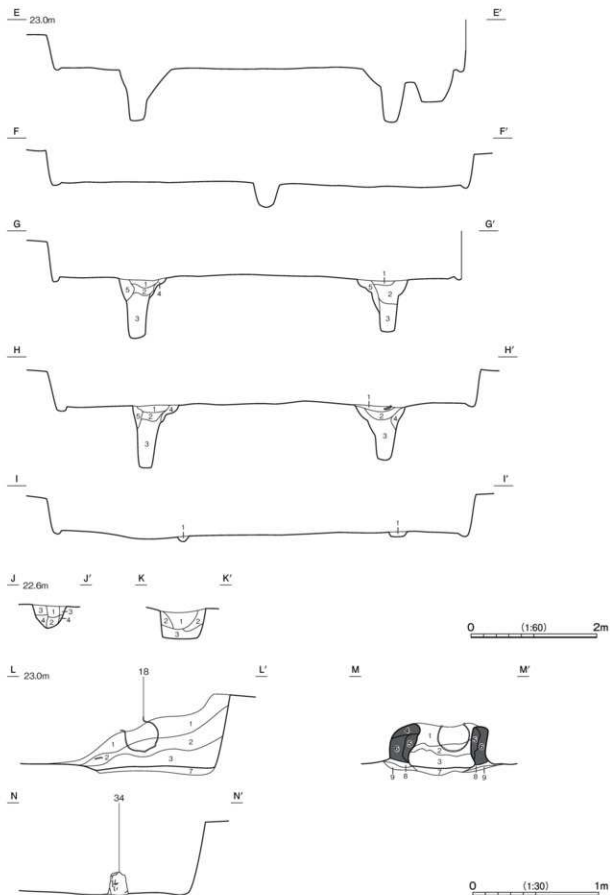
#### 間仕切り溝土層解説

- 褐色 ロームブロック少量



第 18 图 第 140 号竖穴建物跡实测图(1)





第 19 图 第 140 号竖穴建物迹实测图(2)

**貯蔵穴** 竈の北東側に位置し、長軸76cm、短軸64cmの隅丸長方形である。深さは51cm、底面はU字状で、壁は外傾している。3層に分層でき、ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

**貯蔵穴土層解説**

- |          |                        |        |                |
|----------|------------------------|--------|----------------|
| 1 黒 褐色   | 焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量 | 3 黄 褐色 | ローム粒子少量、黒色粒子微量 |
| 2 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量   |        |                |

**覆土** 6層に分層できる。第3～5層は焼土ブロックやロームブロックが多量に含まれていることや堆積状況から埋め戻されている。第1・2層は、自然堆積の層である。

**土層解説**

- |        |                  |          |                    |
|--------|------------------|----------|--------------------|
| 1 黒 褐色 | ロームブロック少量        | 4 にぶい黄褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック少量 |
| 2 褐 灰色 | ロームブロック中量        | 5 褐 色    | ロームブロック多量          |
| 3 黒 褐色 | ロームブロック中量、炭化粒子少量 | 6 にぶい黄褐色 | ロームブロック中量          |

**遺物出土状況** 土器器片971点(坏150、椀2、高杯5、甕類734、小型甕3、瓶76、手捏土器1)、土製品5点(土玉1、丸玉2、甕玉1、支脚1)、石器1点(剥片)が出土している。他の遺構に比べ出土遺物が最も多く、遺構全体から出土しているが、特に竈周辺から東部にかけて多く出土している。他の遺構では、床面や覆土下層からの出土が多いが、本跡では覆土中層からの出土も多い。18は竈の覆土中から正位の状態で、34は竈に据え付けられた状態で出土している。8～12は覆土下層、13はP2覆土上層からまとまった状態で出土している。35はP2の覆土中から出土している。また、竈内の34の周辺から、幅50cm、厚さ10cmほどの灰色を呈する堆積物を確認した。

**所見** 竈内から、灰色を呈する堆積物が出土している。自然科学分析の結果、漆喰の可能性があることが判明した。詳細については、分析結果を参照されたい。竈内から出土したこの物質は、堅穴建物の竈の閉塞時に使用された可能性が考えられる。極めて稀なケースであり、今後の資料の蓄積が待たれる。本跡の時期は、出土土器から6世紀後葉と考えられる。

**漆喰状物質の自然科学分析**

はじめに

茨城県つくば市に所在する前野東遺跡では、古墳時代の集落跡が確認されている。今回の発掘調査では、集落を構成する堅穴住居跡の竈内に、灰色を呈する堆積物が確認された。発掘調査所見では、その外観と断面殻片が含まれていたことなどから、竈の閉塞時に用いられた漆喰あるいは漆喰に似た物質ではないかと考えられている。

本報告では、この物質に対して、X線回折分析、薄片作製観察および微細物分析の各分析を行うことにより、その特性を明らかにし、漆喰あるいは類似する物質の検討を行う。

1 試料

試料は、第140号堅穴建物跡より検出された竈内の第3層とされた覆土層より採取された堆積物1点である。試料の外観は、褐灰色を呈するシルト塊であり(PL10)、砂分の含有は多くはない。

2 分析方法

(1) X線回折分析

試料適量を抽出した後、乾燥器において60℃以下の温度で24時間乾燥する。乾燥した試料はメノウ乳

鉢を用いて微粉砕し、測定用のアルミホルダーに充填して測定用試料とする。作成したX線回折測定試料を以下の条件で測定する。

装置：理学電気製 MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu (K $\alpha$ )	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite 湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2°/min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：2～61°

#### (2) 薄片作製観察

薄片観察は、試料を0.03 mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片を作製するために試料を樹脂で固化した後にダイヤモンドカッターにより15×30×15mm程度の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

#### (3) 微細物分析

試料300 gを0.5mmの篩で水洗選別を行い、残留物から今回の目的である牡蠣殻をはじめとする貝殻片等の抽出をする。抽出した微細物は、肉眼、ルーペおよび実体顕微鏡等で観察し、その形態的特徴から、種と部位の同定を行う。

### 3 結果

#### (1) X線回折分析

試験結果の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物を、JCPDS (Joint Committee on Powder Diffraction Standards) のPDF (Powder Data File) をデータベースとしたX線粉末回折線解析プログラムJADEにより検索した上で、同定した。X線回折チャートを第20図に示す。図中の最上段が試料の回折チャートであり、下段が同定された結晶性鉱物もしくは化合物の回折パターンである。検出鉱物の量比は、最強回折線の回折の強度(cps)から、多量(>5000cps)、中量(2,500～5,000cps)、少量(500～2,500cps)、微量(250～500cps)、および、きわめて微量(<250cps)という基準で判定した。以下の文中においては、回折チャートの同定に使用したPDFデータの鉱物名(英名)は括弧内に記している。

回折試験の結果、多量の方解石(calcite)、少量の石英(quartz)およびきわめて微量のクリストバライト(cristobalite)・燐灰石(fluorapatite)・石英(quartz)・酸化カルシウム(CaO)が検出された。方解石の最強回折線は、3.04Å(2 $\theta$  29.4°)において半価幅の狭い、明瞭な回折線を示しており、結晶度は良好とみられる。燐灰石、酸化カルシウムの回折線は微弱であるため、未含有である可能性も考えられる。

#### (2) 薄片作製観察

偏光顕微鏡下において含有される碎屑物等の状況について観察記載を行った。鏡下における量比は、薄

片上の観察面全体に対して、多量 (> 50%)、中量 (20 ~ 50%)、少量 (5 ~ 20%)、微量 (< 5%) およびきわめて微量 (< 1%) という基準で目視により判定した。代表的な個所については下方ボーラーおよび直交ボーラー下において写真撮影を行い、写真図版として PL10 に添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。本試料の白色部分では、粒径 0.03mm 以下程度の炭酸塩鉱物が基質を構成し、中量の孔隙が散在している。基質には細粒な炭質物や不透明鉱物も伴われるが、炭酸塩鉱物がほとんどを占めている。炭酸塩鉱物は X 線回折分析の結果を考慮すると、方解石と判断される。

碎屑片としては、極細粒砂～中粒砂サイズの石英、角閃石、黒雲母が認められるが、きわめて微量である。擬球状の粒子として、径 0.1 ~ 2mm 大の砂混じり粘土塊が少量程度含まれ、散点状に分布する。その他、径 0.5 ~ 1.5mm 程度の植物片や炭酸塩鉱物に置換された植物片の仮像が微量点状にしている。

#### (3) 微細物分析

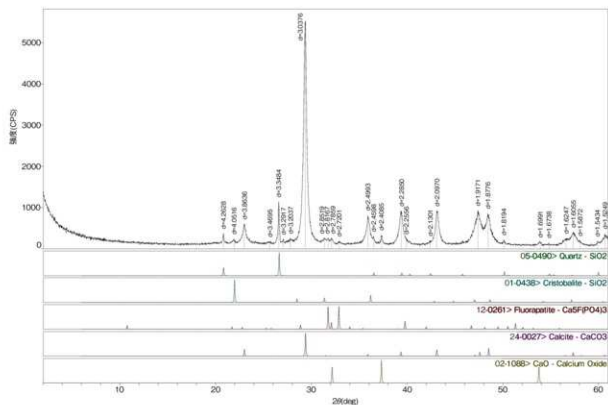
洗い出し処理後の残留物は 42g あった。この中より貝殻片等の確認をおこなったが、白色を呈する微細な碎屑物は認められたが、形態から貝殻片と識別できるようなものは認められなかった。

## 4 考察

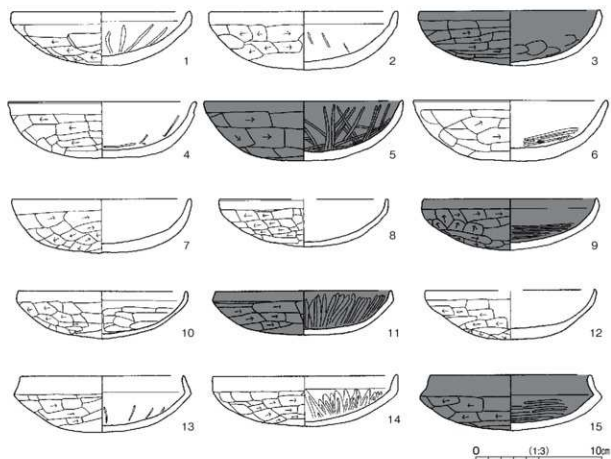
一般に漆喰は、水酸化カルシウムいわゆる消石灰を原材料としてこれに植物繊維やいわゆる骨材としての砂などが加えられた建築材料とされている。そして漆喰は塗られた後に、空気中の二酸化炭素と反応することにより水酸化カルシウムから炭酸カルシウムに変化して硬化する。この硬化した炭酸カルシウムはほとんどが方解石とされている。今回の試料は、X 線回折による分析結果と薄片による観察結果から、その主な材質は方解石であると考えられる。したがって、試料の採取された堆積物は、漆喰を構成する物質と同様の物質から構成されているということが出来る。さらに、薄片観察により少量の粘土塊や微量の植物片なども確認されたことから、漆喰の材質にかなり近いものであると考えることができる。

また、X 線回折では酸化カルシウムが検出されたことにも注目される。酸化カルシウムはいわゆる生石灰であり、一般的には炭酸カルシウムを 900℃ 程度に加熱することによって二酸化炭素を飛ばして得られる物質である。そして生石灰は、水と反応させて上述した漆喰の原材料となる消石灰となるのである。すなわち、漆喰の原材料のさらに原料となる物質である。生石灰は自然にはほとんど存在しない化合物であることも考慮すれば、試料中の酸化カルシウムは漆喰原材料に由来する可能性が高く、試料が採取された堆積物は漆喰とほぼ同様の工程を経て生成された物質であると考えられる。

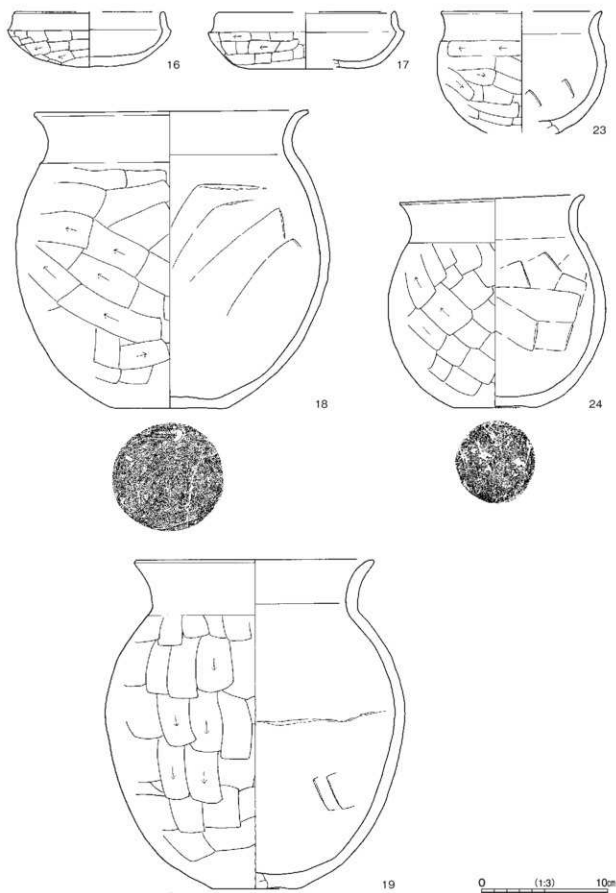
なお、生石灰のさらに原材料となる炭酸カルシウムであるが、工業的には石灰岩が用いられている。ただし、貝殻も同様の炭酸カルシウムから構成されていることから、貝殻を多量に使えば生石灰の原料とすることも可能である。今回の分析調査では薄片観察および微細物分析において、貝殻片は確認できなかったものの、発掘調査所見では、第 3 層から蛸殻片が確認できるとされる。このような現地発掘調査所見を鑑みると、貝殻(蛸殻)を原料として、漆喰が作られた可能性は高いものと考えられる。今後は、類例の分析事例を得た上で、その原材料について検討をする必要があると考えられる。また、薄片観察では微量の植物片が確認され、漆喰を作る際に混入されたものと考えられた。今後は、植物珪酸体分析等を行いどのような植物を混ぜていたのかについて検証することにより、当時の漆喰の原材料や製作工程について資料を得ることができると考えられる。



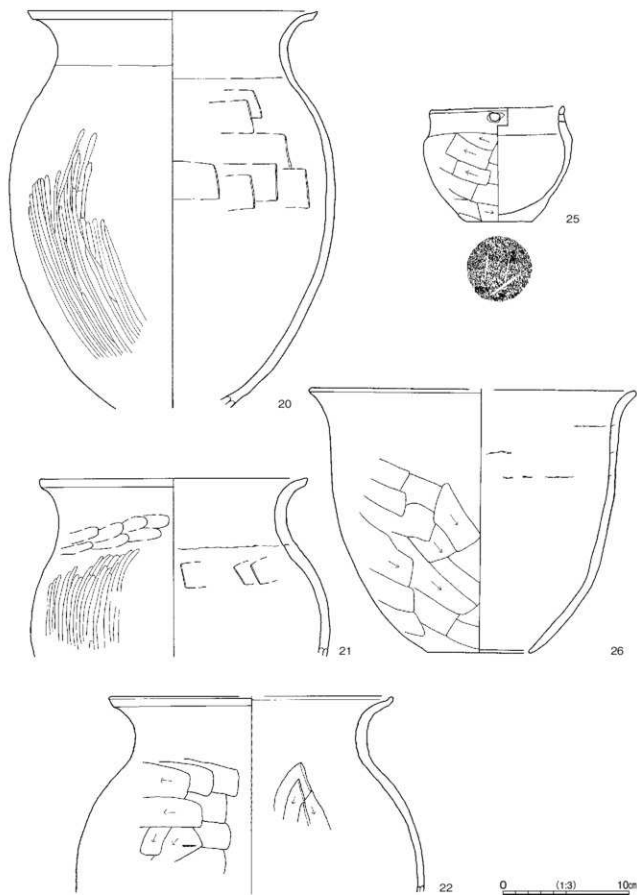
第20図 第140号竪穴建物跡竪第3層（漆喰状物質）のX線回析チャート



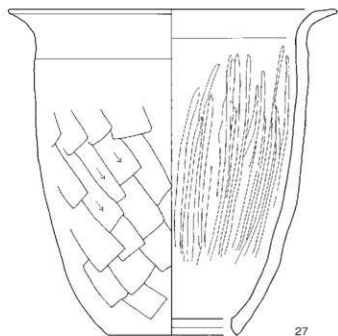
第21図 第140号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



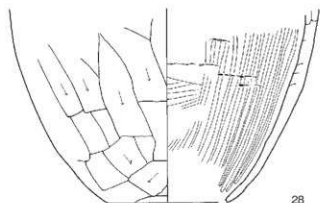
第 22 图 第 140 号竖穴建物跡出土遺物実測図(2)



第23图 第140号竖穴建物跡出土遺物実測図(3)



27



28



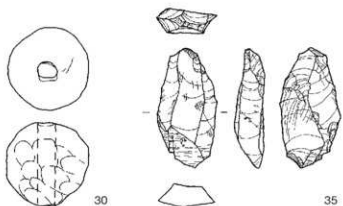
29



34



0 (1:3) 10cm



30



35



31

32



33

0 (2:3) 4cm

0 (1:1) 2cm

第24图 第140号建物跡出土遺物実測図(4)



第 140 号竪穴建物跡出土土物観察表 (第 21 ~ 24 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
1	土師器	坏	14.0	4.3	-	長石・石英・礫	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ 一部ヘラ磨き	覆土下層	95%
2	土師器	坏	14.8	4.7	-	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ 一部ヘラ磨き	覆土下層	95% PL 7
3	土師器	坏	14.3	4.4	-	長石・石英・赤色粒子	黒濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ 一部ヘラ磨き	床面	95% PL 7
4	土師器	坏	14.8	4.5	-	長石・石英	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ 一部ヘラ磨き	覆土下層	95% PL 7
5	土師器	坏	15.8	4.8	-	長石・石英	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラ磨きナデ	覆土下層	90% PL 7
6	土師器	坏	15.4	4.8	-	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ 一部ヘラ磨き	覆土中・下層	90%
7	土師器	坏	14.2	4.3	-	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位・斜位のヘラ削り 体部内面ナデ	覆土中層	95%
8	土師器	坏	[13.2]	3.8	-	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	覆土下層	80%
9	土師器	坏	13.8	4.1	-	長石・石英・赤色粒子	黒濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位・斜位のヘラ削り 体部内面ヘラ磨きナデ	覆土下層	95% PL 7
10	土師器	坏	13.4	3.8	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位・斜位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	覆土下層	95% PL 7
11	土師器	坏	14.0	3.5	-	長石・石英・赤色粒子	黒	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラ磨き	覆土下層	90%
12	土師器	坏	[13.4]	3.9	-	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ナデ	覆土下層	60%
13	土師器	坏	13.0	4.5	-	長石・石英・赤色粒子	黒濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ナデ 一部ヘラ磨き	P 2 覆土上層	90% PL 7
14	土師器	坏	14.0	4.0	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラ磨き	覆土下層	70% PL 7
15	土師器	坏	12.8	4.4	-	長石・石英・赤色粒子	にぶい濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラ磨きナデ	覆土中	50%
16	土師器	坏	[11.6]	4.4	-	長石・石英・赤母	にぶい澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ナデ	覆土中層	30%
17	土師器	坏	[14.0]	4.5	-	長石・石英・赤母	にぶい澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	床面	30%
18	土師器	甕	21.6	23.7	8.8	長石・石英・赤色粒子	にぶい濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位・縦位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	甕内	90% PL 7
19	土師器	甕	18.7	26.2	[7.2]	長石・石英・礫	にぶい濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位・縦位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	床面	50% PL 7
20	土師器	甕	23.0	(31.5)	-	長石・石英	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面横位のヘラナデ	覆土下層	40%
21	土師器	甕	21.6	(14.2)	-	長石・石英	普通	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面上段ナデ 中位ナデ 体部内面ヘラナデ 縁部みぞ	床面	30%
22	土師器	甕	[22.6]	(15.5)	-	長石・石英・赤母	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面横位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	覆土下層	30%
23	土師器	小形甕	[12.6]	4.7	-	長石・石英	灰黄濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面ヘラ削り 体部内面ヘラナデ	南部覆土中	50%
24	土師器	小形甕	14.6	16.9	-	長石・石英	にぶい澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のヘラ削り 体部内面ヘラナデ	床面	90% PL 8
25	土師器	小形甕	10.4	9.2	5.2	長石・石英・礫	にぶい濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 口縁部に穿孔 体部外縁斜位のヘラ削り 体部内面ナデ 底部本蓋痕	覆土下層	90% PL 8
26	土師器	瓶	[25.8]	20.9	8.2	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄澄	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のヘラ削り 体部内面下段ヘラナデ 縁部みぞ	覆土中層・床面	60% PL 8
27	土師器	瓶	25.6	25.5	10.1	長石・石英・赤母	にぶい赤濁	普通	口縁部外・内面横ナデ 体部外面斜位のヘラ削り 体部内面横位のヘラ磨き	覆土下層・床面	70% PL 8
28	土師器	瓶	-	(15.2)	9.4	長石・石英・赤色粒子	灰濁	普通	体部外縁斜位のヘラ削り 体部内面横位のヘラ磨き	覆土中層	40%
29	土師器	手捏	5.2	2.7	5.9	長石・石英	にぶい黄澄	普通	体部外・内面ナデ	覆土中層	70%

番号	器種	径	厚さ	孔径	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
30	土玉	3.2	3.3	0.37	30.37	長石・石英	にぶい澄	外面ナデ 一方向からの穿孔	P 2 覆土中	PL 9
31	丸玉	0.8	0.5	0.12	30.36	長石・石英	赤灰	外面ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	PL 9
32	丸玉	0.7	0.63	0.2	0.31	長石・石英	濁灰	外面ナデ 一方向からの穿孔	覆土下層	PL 9
33	薬玉	1.29	1.71	0.26	2.63	長石・石英	黒濁	外面ナデ 一方向からの穿孔	床面	PL 9

番号	器種	最小径	最大径	高さ	重量	胎土	色調	特徴	出土位置	備考
34	支脚	(6.6)	9.7	(12.0)	69.0	長石	にぶい濁	外面ヘラ削り 一部欠損	竈次床面	PL 9

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
35	割片	4.7	2.4	1.2	11.29	水晶	縦長割片 下部に自然面を残す 先端部欠損	P2 覆土中	PL 9

表2 古墳時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模 長軸×短軸(m)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	備考	
								土壇穴	出入口	ピット	伊・甕					石蔵穴
135	-F94	N-48°-W	方形	5.84×5.76	20~30	平坦	全周	4	1	1	伊1	1	自然人為	土師器	5世紀中葉	
136	-F92	N-42°-W	方形	7.48×7.32	4~18	平坦	[全周]	4	1	-	伊2	1	人為	土師器・石器	5世紀中葉	
137	-F90	N-9°-W	方形	8.40×8.34	52~54	平坦	全周	4	2	4	北壁	1	自然人為	土師器、土製品、石製品	6世紀中葉	SK463→本跡
138	-F86	N-24°-W	[方形]	4.54×(3.32)	20~24	平坦	[全周]	2	1	-	伊2	1	自然人為	土師器	5世紀中葉	
139	-F8a	N-16°-W	方形	6.18×5.94	10~28	平坦	[全周]	4	1	-	伊1	1	自然人為	土師器、石製品、金属製品	6世紀中葉	
140	-E78	N-45°-W	方形	6.88×6.82	50~54	平坦	[全周]	4	1	-	北西壁	1	自然人為	土師器、土製品、石器	6世紀中葉	

## 2 近代の遺構と遺物

当時代の遺構は、炭焼窯跡2基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

### 炭焼窯跡

#### 第1号炭焼窯跡（第25・26図）

**位置** 調査区西部の-F79区、標高23mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第448・453・454号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 北部は削平されており、東部は土坑に掘り込まれているため、炭化室の一部が残るのみである。

現存するのは南北軸が2.86mで、平面形は不明である。主軸方向はN-6°-Eである。

**点火室** 削平されており、確認できなかった。

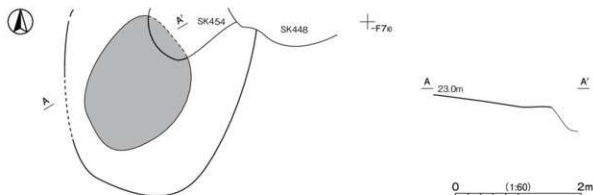
**炭化室** 北部及び東部が壊されているため奥行き2.86m、幅2.98mしか確認できなかった。平面形も不明である。深さは20cmである。窯底は北に向かって緩く傾斜し、底面は皿状である。窯壁の立ち上がりは、削平により確認できなかった。窯底は、火熱を受けて赤変硬化している。

**煙道部** 削平により、確認できなかった。

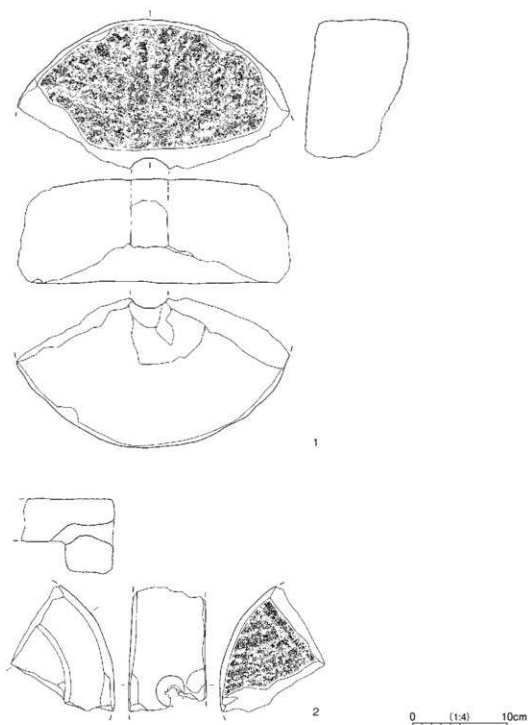
**覆土** 削平により、土層は確認できなかった。

**遺物出土状況** 炭焼窯の構築材として転用されたと思われる石臼2点が、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から近代と思われる。



第25図 第1号炭焼窯跡実測図



第26图 第1号炭烧窑跡出土遺物実測図

第1号炭烧窑跡出土遺物観察表 (第26图)

番号	部 種	径 幅	厚 志	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
1	石目 (下段)	[32.0]	-	11.0 (6,600)	花崗岩	上面主溝六分画	覆土中	PL. 9
2	石目 (上段)	[28.0]	-	8.2 (1,200)	花崗岩	底面主溝六分画 側面横打込穴	覆土中	

## 第2号炭焼窯跡（第27・28図）

**位置** 調査区中央部の-F 8e7区、標高22mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第444～447号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 全長5.80mの瓢箪形で、主軸方向はN-27°-Wである。

**点火室** 東部が第444・446号土坑に掘り込まれているため、確認できたのは幅2.12m、奥行き2.66mの楕円形で、深さは20cmである。底面は北に向かってわずかに傾斜し、壁は外傾している。

**炭化室** 東部が攪乱により壊されているため、確認できたのは幅1.38m、奥行き1.60mで、楕円形を呈し、深さは24cmである。窯底は北に向かって緩く傾斜し、底面にはわずかに凹凸がみられる。窯壁は、外傾している。窯底と窯壁は、火熱を受けて赤変硬化している。

**煙道部** 奥壁の中央に位置し、緩やかに立ち上がっている。

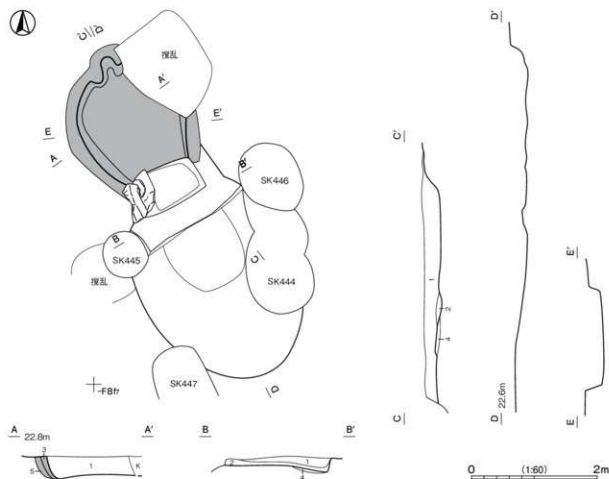
**覆土** 5層に分層できる。第1～4層は焼土ブロックやロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

### 土層解説

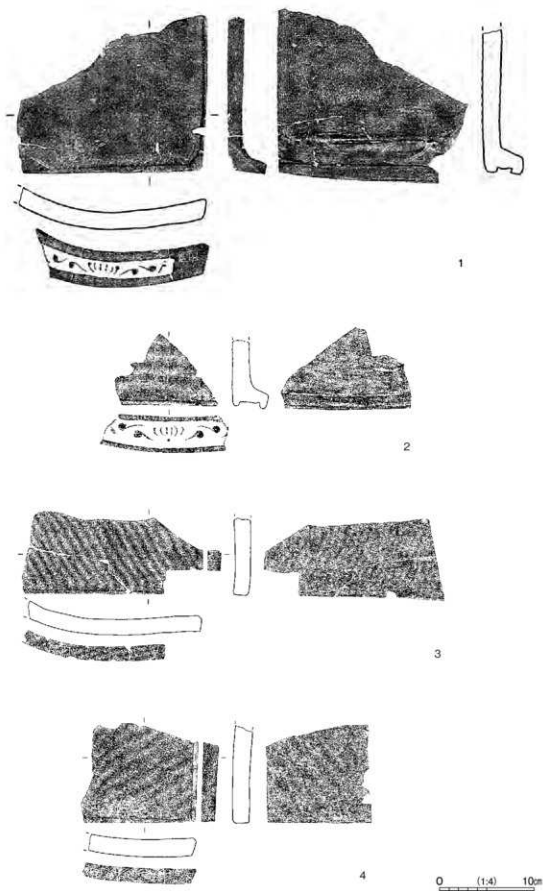
- |                               |                        |
|-------------------------------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土ブロック中量               |                        |
| 2 黄灰色 ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 灰白色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 3 赤褐色 粘土ブロック少量                | 5 明赤褐色 粘土ブロック少量        |

**遺物出土状況** 炭焼窯の構築材として転用されたと思われる瓦4点（平瓦）が、覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土遺物から近代と思われる。



第27図 第2号炭焼窯跡実測図



第28图 第2号炭烧窑跡出土遺物実測図

第2号炭焼窯跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	瓦当高	瓦当幅	長さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	数	ほか	出土位置	備考
1	瓦	軒平瓦	(19.5)	(3.8)	(16.3)	長石・雲母	にぶい橙	普通	凹面ナデ	凸面ナデ	唐草文「石川」刷印	覆土中	PL.9
2	瓦	軒平瓦	(14.0)	(3.8)	(8.0)	長石・雲母	にぶい橙	普通	凸面ナデ	凹面ナデ	唐草文	覆土中	PL.9
3	瓦	軒平瓦	(18.5)	(1.7)	(9.0)	長石・雲母	にぶい橙	普通	凸面ナデ	凹面ナデ	「高浜」刷印	覆土中	
4	瓦	軒平瓦	(12.0)	(1.7)	(10.7)	長石・雲母	にぶい橙	普通	凸面ナデ	凹面ナデ	「石川」刷印	覆土中	

表3 炭焼窯跡一覧表

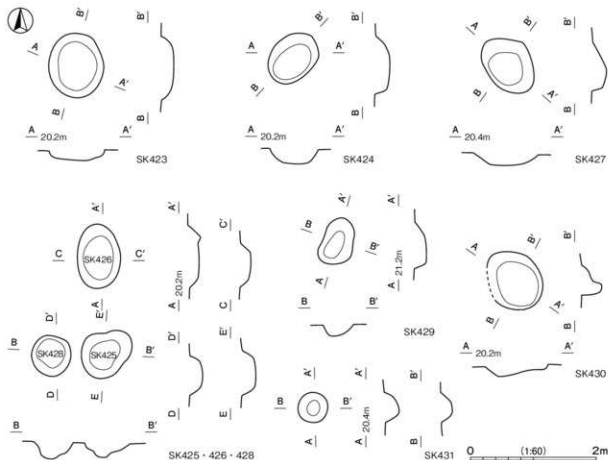
番号	位置	主軸方向	平面形	全長 (m)	点火室			炭化室			煙道部			覆土	主な出土遺物	時期	備考		
					奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	底面	奥行 (m)	横幅 (m)	深さ (cm)	底面	上幅 (m)					下幅 (m)	深さ (cm)
1	-F7D	N-6°-E	不明	(2.86)	-	-	-	(2.86)	(2.86)	20	竪状	-	-	-	石器(石臼)	近代	本誌→SK448・453・454		
2	-F67	N-27°-W	扇形	5.80	2.66	(2.2)	20	傾斜	1.60	(1.30)	24	凹凸	0.26	0.14	22	人為	瓦	近代	本誌→SK441・447

### 3 時期不明の遺構

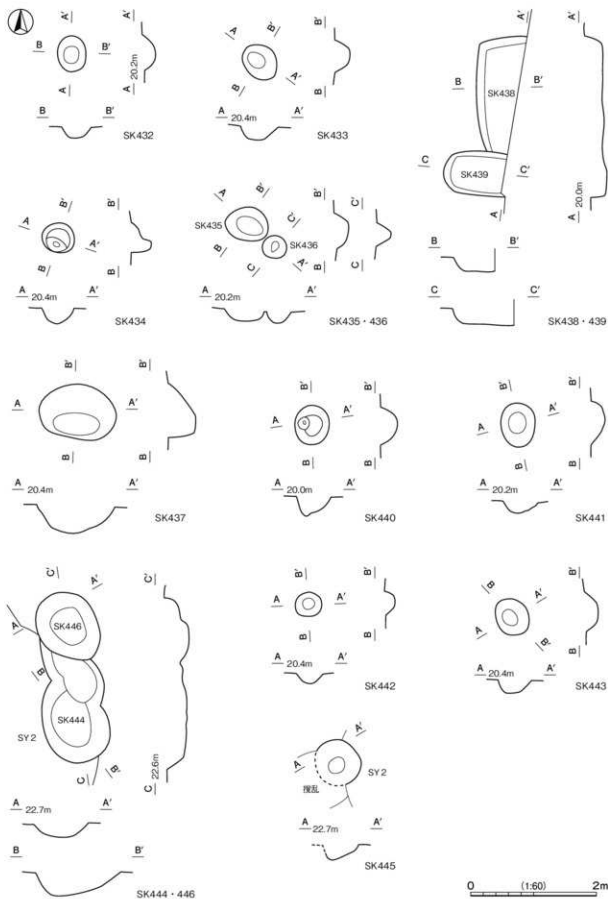
今回の調査で時期や性格が不明な土坑34基、溝跡3条、炉跡2基、方形周溝遺構1基、ピット群2か所を確認した。

#### (1) 土坑

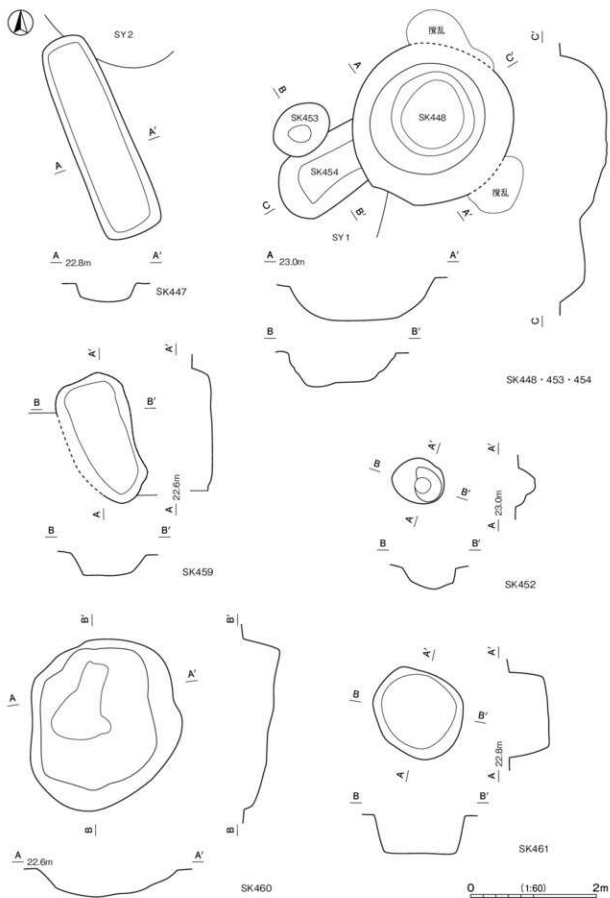
土坑34基は、実測図（第29～32図）及び一覧表を掲載する。



第29図 その他の土坑実測図(1)

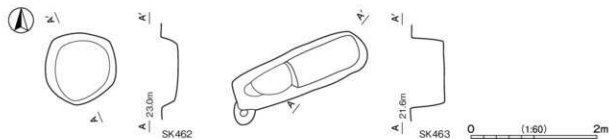


第30図 その他の土坑実測図(2)



第31図 その他の土坑実測図(3)





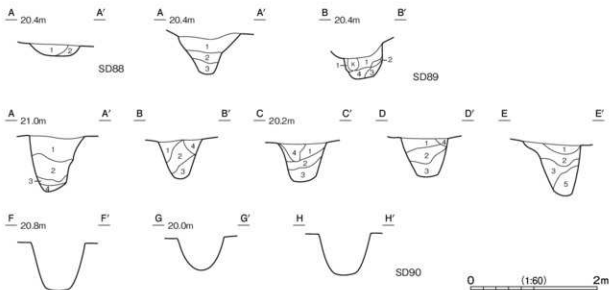
第32図 その他の土坑実測図(4)

表4 時期不明の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
423	-F 07	N-4'-E	楕円形	1.02 × 0.88	18	平坦	外堀	自然	土師器	
424	-F 0c7	N-4'-E	楕円形	0.90 × 0.66	22	平坦	ほぼ直立 外堀	自然		
425	-F 0d7	N-5'-E	楕円形	0.88 × 0.72	22	平坦	ほぼ直立	人為		
426	-F 0e7	N-0'	楕円形	1.02 × 0.69	18	平坦	外堀	自然		
427	-F 0c5	N-4'-W	楕円形	1.00 × 0.72	22	平坦	直立 外堀	人為		
428	-F 0d7	-	円形	0.62 × 0.62	21	皿状	ほぼ直立	人為		
429	-F 0g7	N-3'-E	楕円形	0.77 × 0.52	18	皿状	直立 外堀	自然		
430	-F 0e7	N-4'-W	楕円形	1.02 × 0.84	20	平坦	外堀	自然	土師器	
431	-F 0d5	-	円形	0.47 × 0.47	17	皿状	外堀	人為		
432	-F 0d6	N-0'	楕円形	0.56 × 0.46	16	平坦	ほぼ直立	人為		
433	-F 0f6	N-3'-W	楕円形	0.62 × 0.52	23	皿状	ほぼ直立	自然		
434	-E 0f6	-	円形	0.52 × 0.48	32	有段	ほぼ直立	自然		
435	-F 0c7	N-6'-W	楕円形	0.68 × 0.54	19	皿状	ほぼ直立	自然		
436	-F 0c7	-	円形	0.38 × 0.36	21	皿状	ほぼ直立	自然		
437	-E 0f7	N-8'-W	楕円形	1.23 × 0.86	41	皿状	直立 外堀	自然		
438	-G 0a7	N-1'-W	[長方形]	(1.84) × (0.72)	24	平坦	外堀	人為	土師器	本跡→SK439
439	-G 0a7	N-8'-W	[楕長方形]	(0.95) × 0.71	26	平坦	外堀	人為	土師器	SK438→本跡
440	-F 0j	N-0'	楕円形	0.62 × 0.54	18	皿状	外堀	自然		
441	-G 0a2	N-6'-W	楕円形	0.70 × 0.56	21	皿状	外堀	自然		
442	-F 0h1	-	円形	0.41 × 0.39	16	皿状	ほぼ直立 外堀	自然		
443	-F 0h1	N-4'-W	楕円形	0.64 × 0.52	20	皿状	ほぼ直立 外堀	自然		
444	-F 8c7	N-7'-W	[楕円形]	(2.02) × 0.98	34	皿状	縦跡	人為	土師器	SY2→本跡 →SK446
445	-F 8c7	-	[円形]	0.73 × (0.68)	25	皿状	縦跡	人為		SY2→本跡
446	-F 8c7	N-2'-W	楕円形	1.18 × 0.95	40	皿状	外堀	人為		SY2→SK444 →本跡
447	-F 8f7	N-2'-W	長方形	3.35 × 0.95	30	平坦	外堀	人為		SY2→本跡
448	-F 7d9	-	円形	2.54 × (2.54)	71	皿状	縦跡	人為		SY1→SK454 →本跡
452	-F 8f7	N-4'-E	楕円形	0.82 × 0.71	32	皿状	直立 外堀	人為		
453	-F 7d9	N-4'-E	楕円形	0.96 × 0.78	53	皿状	外堀	不明		SY1→SK454 →本跡
454	-F 7d9	N-4'-E	[楕長方形]	(1.36) × 1.15	45	平坦	外堀 縦跡	不明		SY1→本跡 →SK453・K448
459	-G 8a9	N-3'-W	[楕長方形]	(1.98) × (1.12)	33	平坦	外堀 縦跡	人為		
460	-F 8f5	N-1'-E	不定形	0.82 × 2.50	54	皿状	ほぼ直立 外堀	自然		
461	-E 8j2	N-3'-W	楕円形	1.50 × 1.36	60	平坦	直立	人為	土師器	
462	-F 7d9	-	円形	1.14 × 1.12	26	平坦	ほぼ直立	自然	土師器	
463	-F 9a2	N-6'-E	長方形	2.20 × 0.72	52	平坦	直立	人為		

(2) 溝跡

溝跡3条は、平面形は全体図(付図)に掲載し、以下、実測図(第33図)及び一覧表を記載する。



第33図 溝跡実測図

第88・89号溝跡土層解説

- 1 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 灰黄褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量

第90号溝跡土層解説

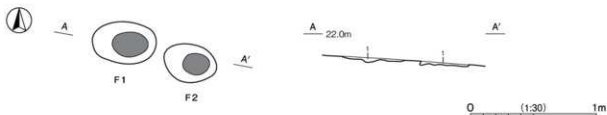
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 にぶい黄褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

表5 溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	縦 横				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
88	E08 ~ E09	N-31°-W	直線状	(4.77)	0.57 ~ 0.71	0.26 ~ 0.44	15 ~ 20	U字状	雑草	人為	土師器	
89	E07 ~ E09	N-47°-W	直線状	(7.48)	0.54 ~ 0.74	0.15 ~ 0.25	40 ~ 60	V字状	外堀	人為		
90	E03 ~ G06	N-13°-W	直線状	(52.32)	0.28 ~ 0.46	0.12 ~ 0.21	45 ~ 77	U字状	外堀	人為	土師器	

(3) 炉跡

今回の調査で時期や性格が不明な炉跡2基を確認した。以下、実測図(第34図)及び一覧表に掲載する。



第34図 第1・2号炉跡実測図

第1・2号炉跡土層解説

- 1 赤褐色 焼土粒子多量

表6 炉跡一覧表

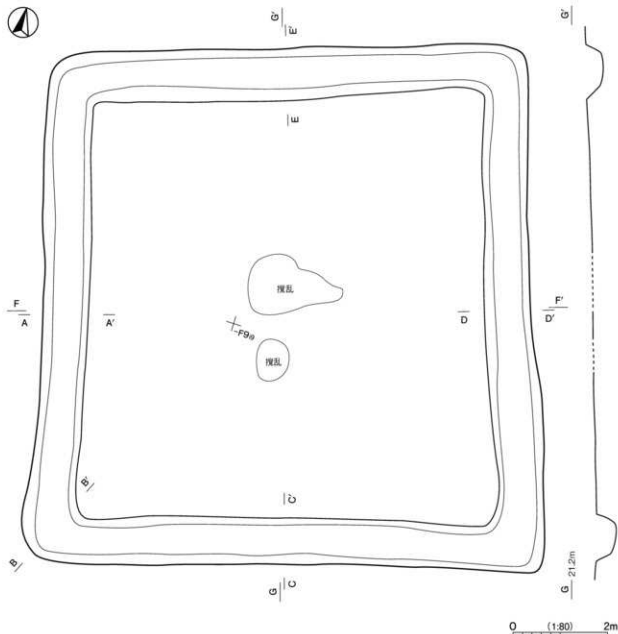
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底 面	機 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	-F 9g3	N-87°-W	楕円形	0.51×0.34	6	平坦	外堀	人為		
2	-F 9g4	N-73°-W	楕円形	0.44×0.32	4	平坦	外堀	人為		

(4) 方形周溝遺構

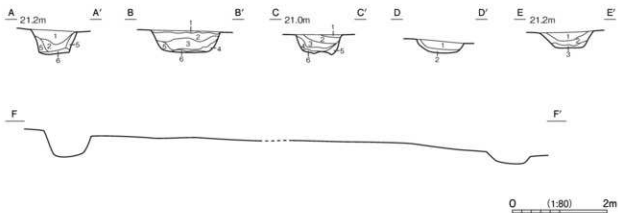
第1号方形周溝遺構 (第35・36図)

位置 調査区東部の-F 9h9区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 外法が南北軸11.14m、東西軸10.68m、内法が南北軸9.04m、東西軸8.66mである。軸方向はN-27°-Wで、平面形は隅丸方形である。方台部は上部が削平されており、盛土などは不明である。



第35図 第1号方形周溝遺構実測図(1)



第36図 第1号方形周溝構造実測図(2)

**周溝** 全周する。上幅0.92～1.14m，下幅0.54～0.72m，深さは21～60cmで，断面はU字状である。外縁部は四辺ともほぼ直線状で，ほぼ平坦である。壁は方台部側，外縁部側とも外傾して立ち上がっている。

**覆土** 6層に分層できる。全体にロームブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

**土層解説**

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| 1 暗褐色 ロームブロック微量 | 4 黒褐色 ロームブロック少量  |
| 2 黒褐色 ロームブロック少量 | 5 暗褐色 ロームブロック少量  |
| 3 黒色 ロームブロック少量  | 6 灰黄褐色 ロームブロック少量 |

**遺物出土状況** 遺物は，出土していない。

**所見** 遺物は出土しておらず，時期や性格は不明である。

(5) ビット群

ビット群2か所は配置図を全体図(付図)に掲載し，規模を計測表に記載する。

表7 第11号ビット群ビット計測表

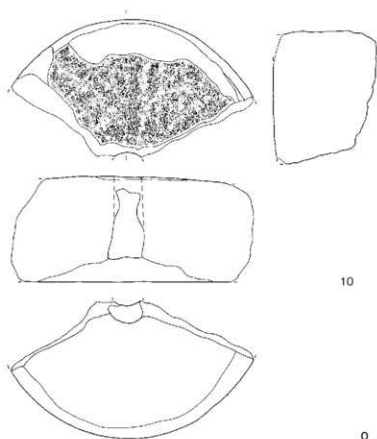
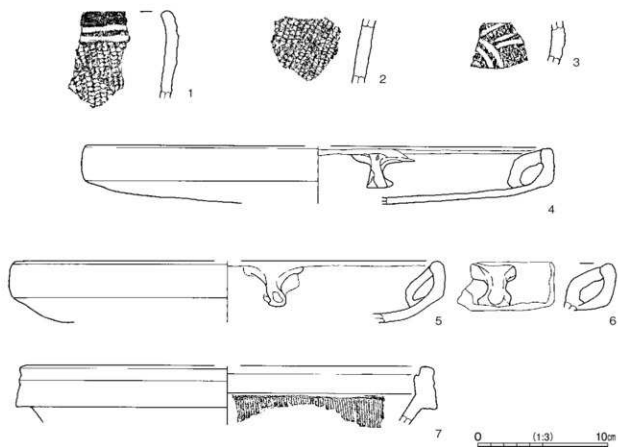
番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	- F0h7	楕円形	45	38	19
2	- F0f6	楕円形	40	30	14
3	- F0f5	[楕円形]	(45)	41	25
4	- F0g5	楕円形	38	34	11
5	- F0g6	楕円形	42	32	15
6	- F0g6	円形	31	30	8

表8 第12号ビット群ビット計測表

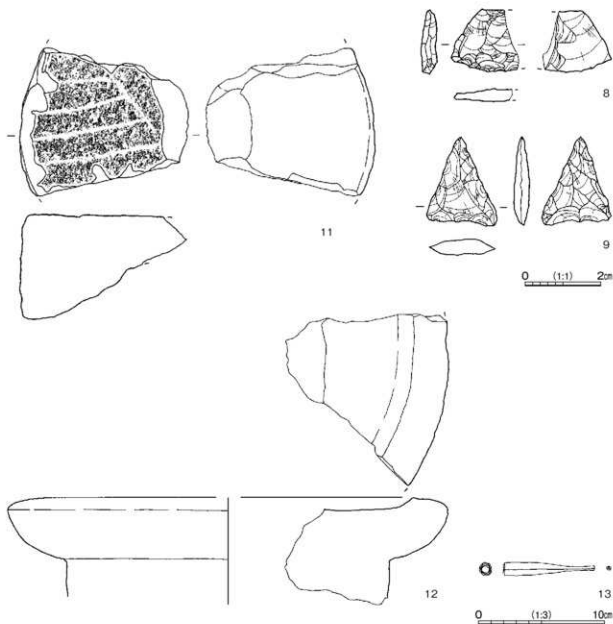
番号	位置	形状	規模 (cm)		
			長径	短径	深さ
1	- E0j8	楕円形	45	31	24
2	- F0h8	楕円形	45	33	23
3	- F0h8	楕円形	33	26	15
4	- F0h7	楕円形	38	28	38

4 遺構外出土遺物

今回の調査で，遺構に伴わない遺物については，実測図及び観察表に掲載する。



第37图 遗構外出土遺物実測図(1)



第38図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第37・38図)

番号	種別	器種	胎土	色調	文種の特徴ほか	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	地縄文RL 施文後に口縁部に沈線文	表土	PL.9
2	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい赤褐色	単節縄文LR	表土	PL.9
3	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・赤色粒子	赤褐色	地縄文LR 施文後に沈線文	表土	PL.9

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
4	土師質土器	始焼	[356]	(44)	[360]	長石・石英・雲母・赤色粒子	灰褐色	普通	口縁部外・内面ナゲ 内耳1か所残存	SI40 覆土中	20%
5	土師質土器	始焼	[326]	(47)	-	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	口縁部外・内面ナゲ 内耳1か所残存	SD90 覆土中	5%
6	土師質土器	始焼	-	(37)	-	石英	靑灰色	普通	口縁部外・内面ナゲ 内耳1か所残存	表土	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様・特徴	輪業	産地	出土位置	備考
7	陶器	磁鉢	[31.2]	(4.4)	-	長石・助赤泥	内面16本以上の櫛歯による環り目	鉄輪	東戸・美達系	SK444 覆土中	5%
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
8	スレイン	1.7	(1.3)	0.4	(1.0)	黒曜石	右側欠損 端部片面に微細網障痕			- F 7 b8	PL 9
9	鏝	2.3	1.8	0.4	1.2	黒色ガラス質 安山岩	両基無茶漬 両面押圧剥離 全面風化			第1号方形形跡 溝遺構覆土中	PL 9
番号	器種	径	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
10	石臼 (下臼)	[29.0]	-	11.4	(5.07)	花崗岩	上面主溝六分画			SK444 覆土中	
11	石臼 (下臼)	[29.0]	-	8.3	(1.33)	花崗岩	底面主溝六分画			SK444 覆土中	
12	茶臼	[35.0]	-	(8.5)	(9.8)	安山岩	側面周囲に風状の凸帯部			SK444 覆土中	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
13	煙管	(7.4)	1.0	1.0	(6.1)	陶	吸口部 吸口円形 口元円形			表土	PL 9

## 第4節 総括

### 1 はじめに

鳥名前野東遺跡は平成11～17年にかけて6回調査が行われ、その成果については『茨城県教育財団文化財調査報告』第191<sup>1)</sup>・215<sup>2)</sup>・281<sup>3)</sup>集に報告されている。これまでに確認された遺構は竪穴建物跡88棟、掘立柱建物跡21棟、方形周溝墓3基、溝跡68条、土坑355基、ピット群10か所などである。今回報告する古墳時代の竪穴建物跡6棟を含めて、集落の変遷を概観し、総括としたい。調査区については、平成17年以前の調査区を東部と中央部に分け、平成25年度の調査区を西部とした。また、竪穴建物跡の規模について、大形竪穴建物跡は面積が36㎡を超えるもの、中形は16～36㎡のもの、小形は16㎡以下のものとした。

### 2 古墳時代の集落の変遷

#### (1) 第1期 (古墳時代前期 4世紀)

この時期に当遺跡の集落が成立したものと思われる。ほぼ同時期に鳥名熊の山遺跡や鳥名八幡前遺跡において集落の成立が確認されており、他地域からの集団的な移住と定着が指摘されている<sup>4)</sup>。竪穴建物跡10棟、方形周溝墓3基が確認されている。竪穴建物跡の規模は大形のものではなく、中形が8棟、小形が2棟である。竪穴建物跡は東部の標高14～17mの台地裾部に位置しており、方形周溝墓が集落の西側から約30m離れた標高17～18mの地点に位置している。このことから集落は、生業の基盤である谷田川沿いの谷津田に近い地点に、方形周溝墓は集落より標高の高い地点に造られたと推測できる。

主な出土遺物は土師器(椀、埴、器台、高坏、壺、甕、台付甕)、土製品(球状土錘)である。

#### (2) 第2期 (古墳時代中期 5世紀)

この時期に集落は拡大し、竪穴建物跡は40棟確認されている。竪穴建物跡の規模は大形が6棟、中形が33棟、小形が1棟である。集落の位置は、一部の竪穴建物跡が東部の台地裾部に残るものの、ほとんどが標高17～19mの台地平坦部へと広がり、さらに平成25年度に調査した西部へと続いている。

主な出土遺物は、土師器（坏、椀、埴、器台、高坏、壺、甕、甌、炉器台）、土製品（球状土錘、支脚）、石器（砥石）、石製品（勾玉、管玉、白玉、紡錘車、有孔円板、剣形品）、ガラス製品（小玉）、炭化米である。第88号竪穴建物跡は床面積が56㎡を超える大形竪穴建物跡で、炉と竈が併設され、初期竈の形態を示している。床面から剣形品、有孔円板、管玉、白玉35個が出土している。第126号竪穴建物跡は床面積が58㎡を超える大形竪穴建物跡で、床面からガラス小玉、有孔円板、剣形品とともに、102個の白玉が南西コーナー部から出土している。これら2棟の大形竪穴建物跡では、出土物から祭祀的な行為が行われていた可能性が高く、また当時の有力者の存在を窺わせる竪穴建物跡である。平成25年度の調査では、この時期の竪穴建物跡は3棟確認されている。第136号竪穴建物跡は大形で、長さ25cmほどの砥石が出土している。第138号竪穴建物跡は小形で、炉周辺から完形に近い高坏3点が出土している。

(3) 第3期（古墳時代後期 6世紀）

この時期にも集落は継続しており、竪穴建物跡は33棟確認されている。竪穴建物跡の規模は大形が8棟、中形が25棟で、小形は確認されていない。本期の集落の位置は台地平坦部で、さらに西部へと続いている。

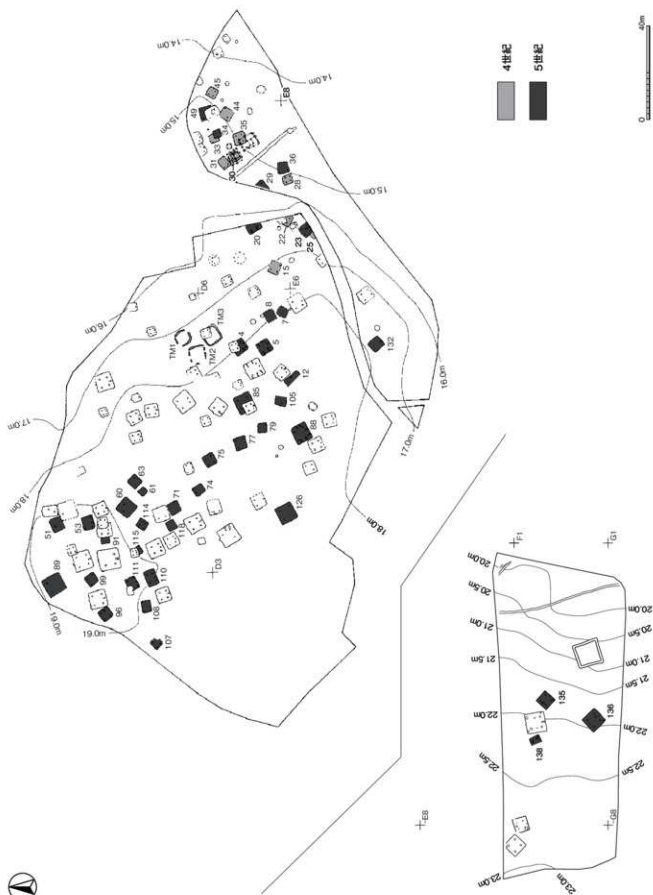
主な出土遺物は、土師器（坏、椀、埴、高坏、鉢、壺、甕、甌、手捏土器）、須恵器（甕）、土製品（勾玉、丸玉、土玉、支脚、紡錘車、羽口）、石器（砥石）、石製品（白玉、紡錘車）、鉄製品（釘）、炭化米、炭化種子、桃の種子である。中央部から北部にかけて、7棟の大形竪穴建物跡が確認されており、第98号竪穴建物跡からは土製の勾玉が、第100号竪穴建物跡からは土玉と滑石製の白玉が出土している。第123号竪穴建物跡からは石製紡錘車、手捏土器が、第94号竪穴建物跡からは土製の勾玉・紡錘車が出土している。また、第106号竪穴建物跡は竈と炉を併設しており、鉄滓51点が出土していることから、鍛冶関係の工房の可能性がある。第120号竪穴建物跡からは土師器の供献具、日常具とともに須恵器甕が出土している。平成25年度の調査では、この時期の竪穴建物跡は3棟確認されている。第137号竪穴建物跡は床面積が約70㎡で当遺跡内では最大級の大形である。土師器の坏や甕が多数出土したほか、土製の土玉や管玉、丸玉、甕玉、支脚、滑石製の白玉が出土している。また、第140号竪穴建物跡も大形で土師器の坏や甕が多数出土したほか、土製の土玉や丸玉、甕玉、支脚などが出土している。特に坏については完形品が多い。これらの事実から前時代から集落の有力者層が存在し、勢力を維持していた可能性がある。また、有力者層のものと考えられる大形竪穴建物跡から紡錘車や鉄滓が出土していることから、集落内において繊維生産や鉄製品生産を行う体制が確立していた可能性が考えられる。第139号竪穴建物跡は中形で、刀子のほか有孔円板が出土している。

(4) 第4期（古墳時代後期 7世紀）

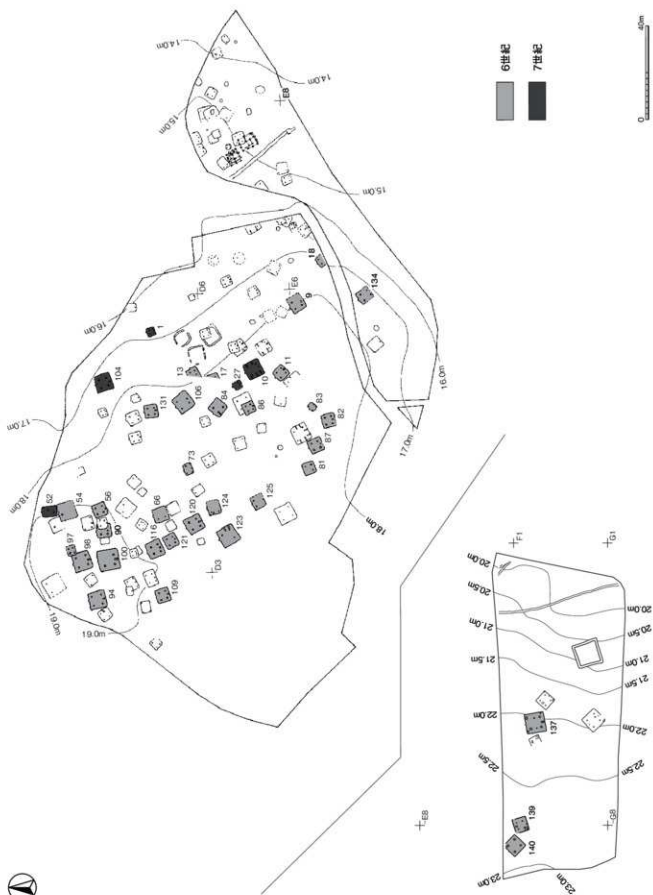
この時期になると集落の規模は縮小し、竪穴建物跡は5棟である。規模は大形が2棟、中形が1棟、小形が2棟である。台地平坦部に広がっていた集落が、標高18mほどの東側の台地縁辺部に集まっている。

主な出土遺物は土師器（坏、椀、甕、手捏土器）、須恵器（フラスコ瓶）、土製品（小玉、支脚）、石器（砥石）である。当遺跡では、本期後半に今まで継続していた集落が途切れる。谷田川流域では7世紀後半になると、建物の小形化と集落規模の縮小が進み、消滅する集落が見られる<sup>5)</sup>。当集落はこの傾向と合致している。平成25年度の調査では、この時期の竪穴建物跡は確認されていない。





第39图 鸟名前野東遺跡集落変遷図(1)



第40図 高名前野東遺跡集落変遷図(2)

### 3 おわりに

古墳時代前期から後期にかけての集落の変遷を述べてきた。古墳時代前期（4世紀）に成立した当遺跡の集落は、中期（5世紀）から後期（6世紀）にかけて存続し、周辺の集落と同様7世紀になると縮小している。また、当遺跡の集落の位置は、谷田川に面した台地東側の裾部から時代とともに標高が高くなる中央の平坦部へと拡大し、さらに平成25年度の調査区である西側へと広がっていったことが看取できる。集落の位置が台地裾部から平坦部に移っていった理由は、当時の食糧生産が谷津田における米作中心の生産活動から、開拓が進み、台地上で畑作も行われるようになるからで、当地における農耕の原型ができた過程を見ることができる。

#### 註

- 1) 寺門千勝・田原康司・梅澤貴司『鳥名前野東遺跡・鳥名境松遺跡・谷田部漆遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』茨城県教育財団文化財調査報告第191集 2002年3月
- 2) 飯泉達司『鳥名前野東遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』茨城県教育財団文化財調査報告第215集 2004年3月
- 3) 小松崎和治『鳥名境松遺跡・鳥名前野東遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』茨城県教育財団文化財調査報告第281集 2007年3月
- 4) 稲田義弘『鳥名熊の山遺跡 鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』茨城県教育財団文化財調査報告第190集 2002年3月
- 5) 稲田義弘『鳥名熊の山遺跡の様相について』「古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸河内郡を中心として」茨城県考古学協会 2005年2月

写 真 图 版



遺跡遠景



遺跡全景

PL2



第135号竖穴建物跡



第136号竖穴建物跡



第137号竖穴建物跡

第138号竖穴建物跡  
遺物出土狀況



第138号竖穴建物跡



第139号竖穴建物跡



PL4



第140号竖穴建物跡  
遺物出土状況



第140号竖穴建物跡  
竈遺物出土状況



第140号竖穴建物跡





第135~137号竖穴建物跡出土土器

PL6



第135・138・139号竖穴建物跡出土土器



第140号竖穴建物跡出土土器

PL8



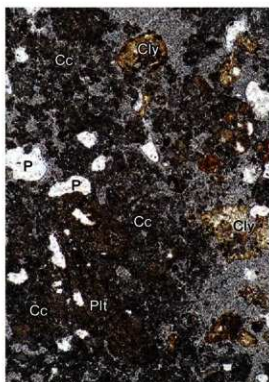
第140号竖穴建物跡出土土器



第136・137・139・140号竪穴建物跡，第1・2号炭焼窯跡，遺構外出土土器，土製品，石器，剥片，金属製品，瓦



1. 試料の外観



2. 薄片下の状況

Cc:方解石.  
Cly:砂混じり粘土塊.  
Pit:植物片.  
P:孔隙.

写真左列は下方ボーラー、写真右列は直交ボーラー下。



0.5mm

## 抄 録

ふりがな	しままへのひがしいせき								
書名	島名前野東遺跡								
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第439集								
著者名	茂木悦男								
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団								
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587								
発行日	2020(令和2)年3月16日								
ふりがな所取遺跡	ふりがな地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因	
島名前野東遺跡	茨城県つくば市島名字前野3,807番地ほか	08220 - 214	36度 3分 19秒	140度 3分 26秒	20 ~ 23m	20130601 ~ 20130831	6,636㎡	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業に伴う事前調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項		
島名前野東遺跡	集落跡	古 墳	竪穴建物跡 6棟		土師器(坏・椀・埴・高坏・壺・埴・甕・小形甕・甕・手捏土器)、土製品(土玉・管玉・丸玉・甕玉・支脚)、石器(砥石)、石製品(白玉・有孔円板)、剥片、金属製品(刀子)				
	生産跡	近 代	炭焼窯跡 2基		石器(石臼・茶臼)、瓦				
	その他	時 期 不 明	土坑 34基 溝跡 3条 炉跡 2基 方形周溝遺構 1基 ピット群 2か所		縄文土器 土師器(坏・椀・甕) 土師質土器(埴埴) 陶器(撞鉢) 石器(スクレイパー・鏃・石臼・茶臼)、金属製品(煙管)				
要 約	当遺跡は、平成11年度から断続的に調査され、今回は平成25年度調査の報告である。今回の調査では、古墳時代中期の竪穴建物跡3棟、後期の竪穴建物跡3棟などが確認された。これまでの調査から、当遺跡の集落は、古墳時代前期(4世紀)に成立し、周辺の集落と同様に中期(5世紀)から後期(6世紀)にかけて拡大し、後期(7世紀)に縮小することが分かった。この時期、当遺跡周辺の集落でも同様の消長をたどることが報告されている。								

## 印刷仕様

編集	OS	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign CC
	図版作成	Adobe Illustrator CC
	写真調整	Adobe Photoshop CC
	Scanning	6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
	図面類	EPSON ES-10000G
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写真	線数	モノクロ175線以上 カラー210線以上
印刷		印刷所へは、Adobe InDesign CCでレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第439集

### 島名前野東遺跡

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道  
新設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

令和2（2020）年 3月13日 印刷

令和2（2020）年 3月16日 発行

発行 公益財団法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

HP <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 株式会社高野高連印刷

〒310-0035 水戸市東原2-8-1

TEL 029-231-0989